高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第4集

大宮・宮崎遺跡Ⅰ

（続　編）

2000.3

高知県幡多郡西土佐村教育委員会

巻頭図版

局部磨製石斧
（大宮・宮崎遺跡２地点出土）
左側・表面、中央・側面、右側・裏面

序

西土佐村は、日本最後の清流四万十川が中央部を流れ、水と緑にかこまれた自然豊かな山村です。面積248㎢、人口約4,000人で、31の集落が点在しています。本流及び支流沿いに発達した耕地は、現在基盤整備が進められています。

平成元年度から県営事業を導入し、ほ場整備を進めてまいりましたが、平成８年３月下旬、工事により大量の縄文土器片が露出し、遺跡が確認されました。ただちに村単独事業による第１次緊急発掘調査を実施したところです。

平成９年度は、補助事業により第２次発掘調査を行い、平行して平成８年度調査時の配石遺構周辺の残土の再確認を行いました。これにより採集したものと表面採取したものを合わせて、今回の報告書を作成することが出来たものです。

報告書作成に際しましては、始終学究的情熱を傾けていただき、全面的にご協力をいただきました日本考古学協会会員木村剛朗先生には衷心より感謝申し上げます。

この報告書につきましては、今後の縄文時代研究のうえでも大変貴重なものになることを確信し、今後における教育・研究の一助となることを期待するものです。また、村民のみなさんが文化財に対する一層のご理解と親しむきっかけになればと願うものです。

最後になりましたが、文化庁、高知県教育委員会文化財保護室の深いご理解によって刊行できますことを、ここに記して、心から感謝とお礼を申し上げ、ごあいさつといたします。

2000年３月

西土佐村教育委員会

教育長　清　水　忠　孝

例　　言

1．本書は平成８年度（1996年）に発掘調査された『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』として出版された報告書の続編である。

2．１地点の遺物は平成９年度（1997年）に今城宗久（西土佐村文化財保護審議会会長）による調査によって採取されたものであり、２地点の遺物は、ほ場整備中に田辺正博（大宮建設社長）、岡村好文（西土佐村産業課係長）、田辺猛（考古研究家）、浜田薫（考古研究家）、今城宗久諸氏によって表面採集されたものである。

3．１・２地点の土器、石器実測図、写真図版ともに木村剛朗（日本考古学協会会員）が作成した。

4．本書の編集は芝正司（西土佐村教育委員会社会教育係長）と木村剛朗が行った。

5．本書の執筆は総て木村剛朗が担当した。

目　　次

巻頭図版
序　　文
例　　言

1．はじめに…… 1
2．1地点の遺物…… 3
(1) 近世の遺物…… 3
(2) 縄文遺物…… 3
(A) 土　　器…… 3
(a) 平城Ⅰ式…… 3
(b) 片　柏　式…… 5
(c) 伊吹町式…… 5
(d) 大宮・宮崎K式…… 5
(e) 中村Ⅰ式…… 5
(B) 石　　器…… 6
(a) 石　　鏃…… 6
(b) 石　材　核…… 6
(c) 水　　晶…… 6
(d) スクレイパー…… 6
(e) 石　　鏃…… 6
(f) 文　様　石…… 9
3．考　　察…… 11
4．2地点の遺物…… 17
(1) 縄文遺物…… 17
(A) 土　　器…… 17
(a) 羽島下層式…… 17
(b) 轟　B　式…… 17
(c) 宿　毛　式…… 17
(d) 三　里　式…… 22
(e) 平城Ⅰ式…… 25
(B) 石　　器…… 26
(a) 局部磨製石斧…… 26
(b) 乳棒状磨製石斧…… 26
(c) 石　　皿…… 29
5．考　　察…… 29

挿　図　目　次

第１図　大宮・宮崎遺跡の位置…… 1
第２図　大宮・宮崎遺跡の位置（№１．第１次発掘調査区）、（№２．第２地点遺物出土地点）… 2
第３図　大宮・宮崎遺跡１地点出土銭貨・鉛玉…… 3
第４図　大宮・宮崎遺跡１地点出土土器…… 4
第５図　大宮・宮崎遺跡１地点出土土器…… 7
第６図　大宮・宮崎遺跡１地点出土石器…… 8
第７図　大宮・宮崎遺跡１地点出土サヌカイト、姫島産黒曜石剥片…… 9
第８図　大宮・宮崎遺跡１地点出土文様石……10
第９図　岩田遺跡出土岩版実測図……12
第10図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器……18
第11図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器……19
第12図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器……20
第13図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器……23
第14図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器……24
第15図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器……26
第16図　大宮・宮崎遺跡２地点出土石器……27
第17図　大宮・宮崎遺跡２地点出土石器……28
第18図　四国西南部の縄文前期轟Ｂ式・羽島下層式土器出土遺跡分布図……30
第19図　四国西南部の縄文後期前葉宿毛式、三里式土器出土遺跡分布図と平城Ⅱ式土器……31
第20図　四国西南部の縄文後期中葉（後半）平城Ⅰ式（鐘崎式系）土器出土遺跡分布図……32
第21図　大宮・宮崎遺跡出土縄文土器編年図……33
第22図　大宮・宮崎遺跡出土縄文土器編年図……34

付　表　目　次

第1表　大宮・宮崎遺跡1地点出土土器観察表……13
第2表　大宮・宮崎遺跡1地点出土石器観察表……14
第3表　大宮・宮崎遺跡1地点出土石器観察表……15
第4表　大宮・宮崎遺跡2地点出土土器観察表……35
第5表　大宮・宮崎遺跡2地点出土土器観察表……36
第6表　大宮・宮崎遺跡2地点出土土器観察表……37
第7表　大宮・宮崎遺跡2地点出土石器観察表……38

写 真 図 版 目 次

PL. 1 (1)大宮・宮崎遺跡1地点（手前）、背景山裾の水田地帯が2地点
(2)大宮・宮崎遺跡2地点全景（中央水田地帯）…… 1

PL. 2 (1)大宮・宮崎遺跡1地点出土鉛玉・銭貨、(2)大宮・宮崎遺跡1地点出土平城Ⅰ式
土器深鉢胴部片、片粕式土器深鉢口縁・胴部片、伊吹町式土器深鉢口縁部片 …… 2

PL. 3 (1)大宮・宮崎遺跡1地点伊吹町式土器深鉢・浅鉢口縁・胴部片、
中村Ⅰ式土器深鉢口縁部片、(2)大宮・宮崎遺跡1地点出土石鏃 …… 3

PL. 4 大宮・宮崎遺跡1地点出土石材核・スクレイパー・水晶 …… 4

PL. 5 大宮・宮崎遺跡1地点出土石鏃 …… 5

PL. 6 大宮・宮崎遺跡2地点出土羽島下層式土器、轟B式土器深鉢口縁部片 …… 6

PL. 7 大宮・宮崎遺跡2地点出土宿毛式土器深鉢口縁部片 …… 7

PL. 8 大宮・宮崎遺跡2地点出土宿毛式土器深鉢口縁・胴部片 …… 8

PL. 9 大宮・宮崎遺跡2地点出土宿毛式土器深鉢・浅鉢口縁・胴部片 …… 9

PL.10 大宮・宮崎遺跡2地点出土宿毛式土器浅鉢胴部片、三里式土器深鉢口縁部片 ……10

PL.11 大宮・宮崎遺跡2地点出土三里式土器深鉢口縁部片 ……11

PL.12 大宮・宮崎遺跡2地点出土三里式土器深鉢・浅鉢口縁部片 ……12

PL.13 大宮・宮崎遺跡2地点出土三里式土器深鉢口縁部片 ……13

PL.14 大宮・宮崎遺跡2地点出土三里式土器深鉢口縁部片 ……14

PL.15 (1)大宮・宮崎遺跡2地点出土平城1式深鉢口縁部片、
(2)大宮・宮崎遺跡2地点出土乳棒状磨製石斧 ……15

PL.16 大宮・宮崎遺跡2地点出土石皿 ……16

大宮・宮崎遺跡Ⅰ（続編）

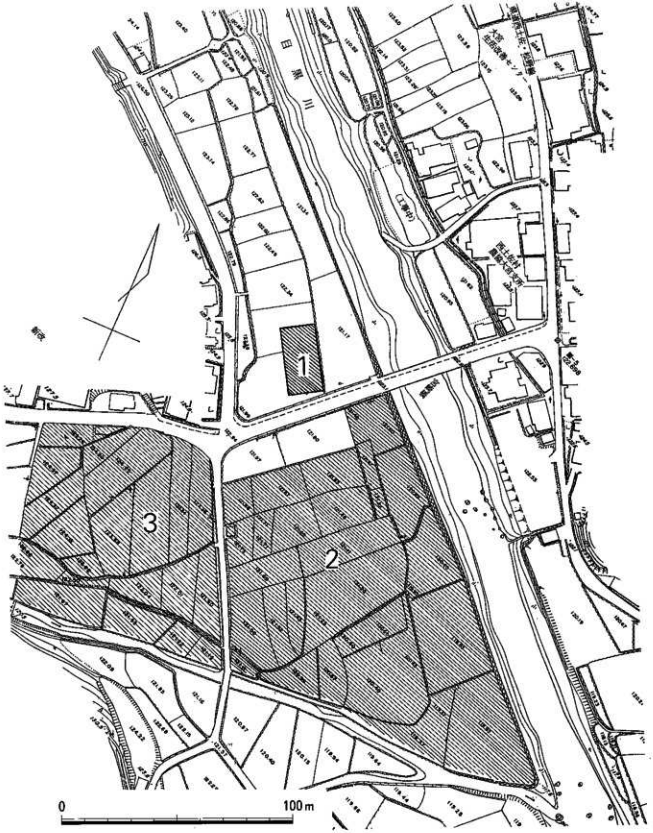
1．はじめに

大宮・宮崎遺跡（高知県幡多郡西土佐村大宮）（第1図）の発掘調査は、第1次が平成8年度に、第2次は平成9年度に実施された。前者は平成11年3月に『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』[1]、後者は平成10年3月に『大宮・宮崎遺跡Ⅱ』[2]として、それぞれ、その成果が記された調査報告書の刊行をみた。

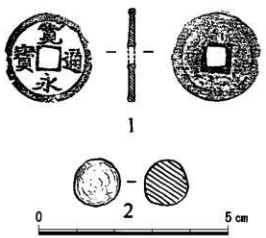
第1次は中・近世の遺物を若干含むものの、主体は縄文後期中葉～後葉にかけてで、その時期の土器、石器を大量に出土し、それに伴う配石遺構19基の検出に成功している。遺物の中で特に目を引くものとして女人像が線描された線刻礫や石棒、サヌカイト製石材核や良好な片粕式、伊吹町式土器などが挙げられ、配石遺構の大部分は後期後葉の伊吹町式期に構築されたことと、その終焉が晩期にあったことも明らかとされた。そして本遺跡は、配石遺構を有する岩谷遺跡[3]（愛媛県北宇和郡広見町）の例と合わせ、非実用的遺物（線刻礫・石棒）の出土などから高知県下初の縄文後期に属する祭祀遺跡と判断された。

第2次は、第1次調査区の西側に隣接する平坦地に設定され実施された。若干の後期縄文土器、石器を見たのみで、期待された住居跡、配石遺構の検出はなく、主体をなすのは中・近世のものであった。輸入陶磁器はまずまずの量出土し、内陸山地における遺跡からの出土として注目され、さらに国内産陶磁器の出土や大型の掘立柱建物跡の検出と共に多大な成果を上げている。

第1図　大宮・宮崎遺跡の位置



第２図　大宮・宮崎遺跡の位置　（No.１）第１次発掘調査区
（No.２）第２地点遺物出土地点
（No.２-３）地点斜線部分は、ほ場整備実施完了個所



第3図　大宮・宮崎遺跡1地点出土銭貨・鉛玉

以上、第1次と第2次にわたる発掘調査が平成8年と9年度に実施されたのであるが、第1次では特に配石遺構内とその周辺の泥を保存していた。それは、調査中に見落とした微細な遺物を後日、篩に掛けて採取する計画をたてていたからである。その作業を平成9年12月に第1次発掘調査補助員今城宗久氏によって短期間ではあったが実施された。ここに、その際採取された遺物と、合わせて平成8年度に下流側に隣接する水田のほ場整備中、岡村好文・出辺正博・田辺猛・浜田薫諸氏によって表採された遺物をも、ここに取り上げ紹介する次第である。ちなみに、篩掛けされた泥は（第2図1）地点のもので、下流側で得られた遺物の表採個所は（同図2）地点である。（同図3）地点もほ場整備されているが、この個所には少数の石器剥片と近世の陶磁器片を確認したのみで他に見るべきものの出土はなかった。以下、遺物を1地点と2地点に分け述べる。

2．1地点の遺物

若干の近世遺物の他は総て縄文後期に属する。縄文期の遺物は土器、石器合わせ約500点を数えるが、土器は大多数が2～3㎝大の細片で、しかも無文部のもので占められ、文様を有するものは僅か23点にとどまる。石器は期待にこたえ石鏃が多く得られ、他に石錘、スクレイパー、石材核等と他に姫島産黒曜石、サヌカイト細片が多数ある。

(1)　近世の遺物

銭貨と鉛玉の2点である（第3図1・2）銭貨は国内銭の寛永通宝で、直径2・3㎝、厚さ0.2㎝、重量2.24ｇを量り、ほぼ完形に近いものである。鉛玉は直径1.3㎝、重量7.74ｇを量る完形で、表面は灰白色に風化変色している。

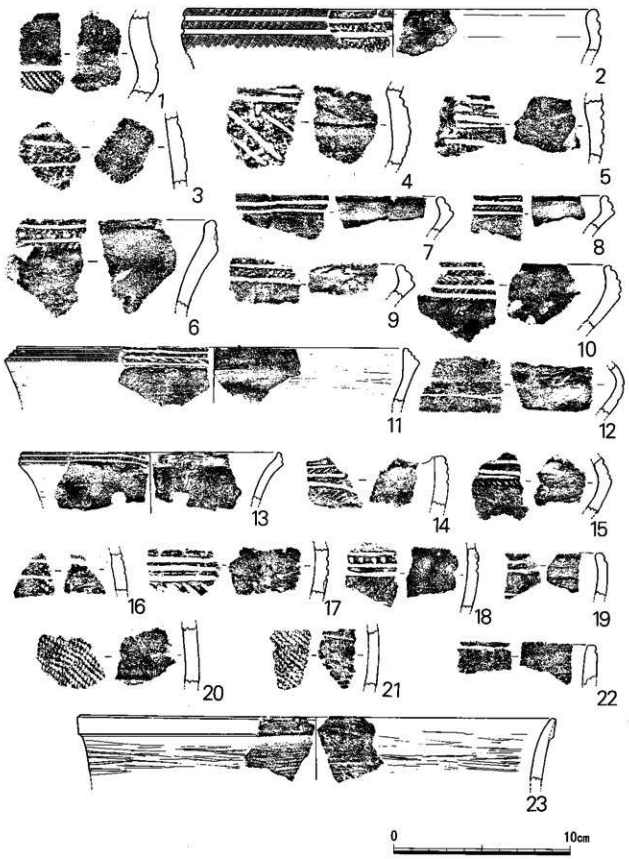
(2)　縄文遺物

(A)　土器（第4図1～23）

23点の土器は既述のとおり総て細片である。それらは文様、器形の特徴から後期中葉平城1式、後期後葉片粕式、同期伊吹町式、後期末葉大宮・宮崎K式（三万田式）、晩期中葉中村1式などである。

(a)　平城1式（第4図1）

深鉢の頸部から胴上部をとどめるもので、器肉は厚い。緩く外反し長く延びる頸部外面は篦研磨され、胴上部との境目に1条の横直線が引かれ、その下部には幅広い縄文帯が磨消縄文手法によっ



第4図　大宮・宮崎遺跡1地点出土土器

て描出されている。

(b) 片粕式（第4図2～5）

口縁部片1点、他は胴上部片である。口縁部片（2）は、「く」字状に緩く内折させ、長く立ち上がる口縁の端部は丸く作られている。外面には縄文ＬＲとなる面に太い沈線で平行横直線2条が巡らされている。（3～5）の胴上部片は（3・4）がＬＲとなる縄文を地文とする面に直接、逆三角形文となる斜行沈線3条が描かれている。（5）は太い平行沈線4条が描かれ、その上段の沈線間には押し引き状の刺突文が連続施文されている。

(c) 伊吹町式（第4図6～19）

深鉢と浅鉢をみるが、前者が圧倒的に多い。（6～9・11・13）は深鉢の口縁部片で、無文となる頸部は引状に外反し、口縁は「く」字状に内折させている。口縁の立ち上がりは短く、端部は尖り気味に作出される。外面には縄文ＬＲ、ＲＬとなる面に直接2条～3条単位の平行横直線が描かれ、（6）の沈線間には円形刺突文が、（11）には斜行刻目文が連続施文されている。

浅鉢（10・14・19）の3点である。（10）の口縁は「く」字状に緩く内湾させ、器壁は外側をわずか肥厚させて外面には幅広い縄文ＬＲが施文され、その縄文を地文とする面に直接4条の平行横直線が描かれ、中央の沈線間には連続斜行刻目文をみる。（14）は緩く内湾し、波状口縁を呈する。口縁端部は水平に調整され、器壁は肉厚く外面には縄文ＬＲが施され、その面に3条単位の沈線が口縁に平行し巡る。（19）の器壁はやや薄く、緩く内曲させ、その端部は丸くおさまる。これの外面には縄文はなく、無文地に平行横直線3条を巡らしている。

胴部（12・15～18）は、（12・15）が浅鉢、（16～18）は深鉢である。浅鉢胴部片2点は、共に外面の縄文はＲＬで、その面に前者は2条、後者は3条の平行横直線が描かれている。深鉢胴部片の（16・17）は、外面に前者は2条、後者は3条の平行沈線が描かれ、後者の沈線下段には連続斜行刻目文が施文されている。（18）は3条の平行横直線文と、その沈線間に円形刺突文を連続施文し構成している。

(d) 大宮・宮崎Ｋ式（第4図22）

1点の深鉢の口縁部片で、器肉は厚く、その端部は水平に調整されている。本式で特徴とする沈線文は口縁外面の端部直下に1条巡らされている。

(e) 中村Ⅰ式（第4図23）

深鉢の口縁部片1点で、器壁は緩く外反し、その端部は尖り気味に作出され、薄手である。外面にみる無刻目突帯は端部よりそのまま作り出され、突帯の形状は上側より圧せられ背の低い断面三角形を呈する。これの外面には横走する細目の条痕が残る。

以上の他に、縄文のみをとどめる深鉢の胴部片（第4図20・21）がある。共に器壁は緩やかに膨らみ、その外面には縄文ＲＬが鮮明に施文されている。

(B) 石器（第５図１～７、第６図１～23）

既述のとおり石器は石鏃を主体に石錘、スクレイパー、石材核と他に水晶がある。

(a) 石錘（第５図１～４）

４点の石錘は総て扁平な楕円形を呈する砂岩礫を素材とする。（１・２）は最大長７㎝、最大幅４㎝前後のやや大型で、（３・４）は最大長さ４～５㎝前後、最大幅３～3.5㎝前後の小型であり、重量は最大70ｇ、最小27ｇ、平均49.25ｇである。加工は、どれも長軸両端部に打ち欠きを加え、凹み部を作り出し礫石錘としている。

(b) 石材核（第５図５）

小型であり全体形は不整楕円形を呈し、片面の全面に剥片剥離痕をとどめ、一方の面には自然面をそのまま残す。剥片剥離は周辺部からなされ、その中央部は盛り上がっている。

(c) 水晶（第５図６）

最大長6.4㎝、最大幅2.5㎝、最大厚1.5㎝を測る比較的大きな無色透明良質の水晶で、断面六角形となり、先端部は潰れて鈍く尖る。また六角形となる側面の角面も部分的に小さく欠けが見られる。基部は打ち欠かれた跡が残り、複雑な剥離調整痕を残す。

(d) スクレイパー（第５図７）

大型、分厚な縦長剥片素材で、片側面に直線的で鋭利な刃部を片面加工によって作出している。なお、これの片面は原礫面をそのまま残す。

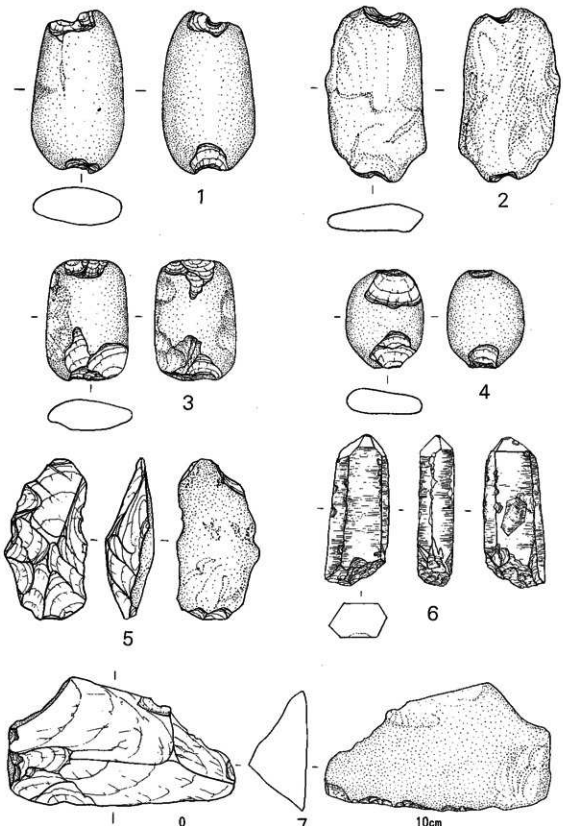
(e) 石鏃（第６図１～23）

23点の石鏃は完形品９点を数え、他は先端、脚部を欠失するものである。石質はサヌカイトが最も多く15点、次いで頁岩が６点、それにチャート１点、姫島産黒曜石も１点含まれている。これらは全体的に薄身で、分厚なものはない。形態的には次の１式～４式までの４つに分けられる。

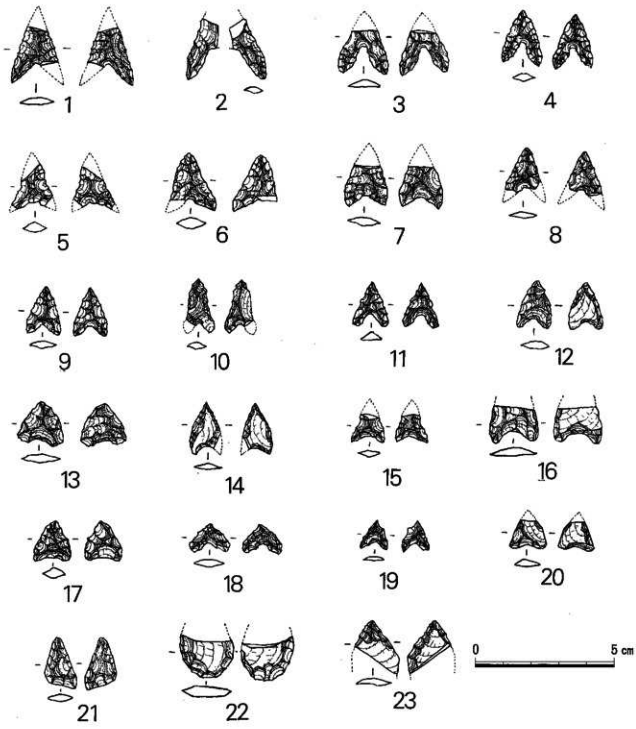
１式石鏃、基部抉入の深いタイプ（第６図２～４・11）。一辺の長さ2.5㎝前後の比較的大型のものが多く、総体的に押圧剥離による加工は入念で、中でも（４）は傑出している。長く作出された脚部の先端は尖るものが多く、(11）のみ水平にカットされ鈍端となっている。

２式石鏃、山形状にやや深く抉られたもの（第６図１・６・８）。本タイプも2.5㎝前後の大きさを持つものである。（１）は先端を欠失するが、復元形は一辺の長さ３㎝の大型鏃となる。いずれも脚端は鋭利に尖る。

３式石鏃、弧状に浅く抉入されたもの（第６図５・７・９・12～20）。石鏃で主体を占めるタイプで、一辺の長さ1.5㎝～２㎝前後の小型で占められ、形態的にも歪みがあり、左右不対称となるもの、第一次剥離面を片面に幅広く残すものなど、全体的に粗製品が多い。（５）は姫島産黒曜石製、(18）は脚部が左右に大きく開き「ハ」字状を呈し、(19）は一辺の長さ1.2㎝を測る超小型である。



第5図　大宮・宮崎遺跡1地点出土石器



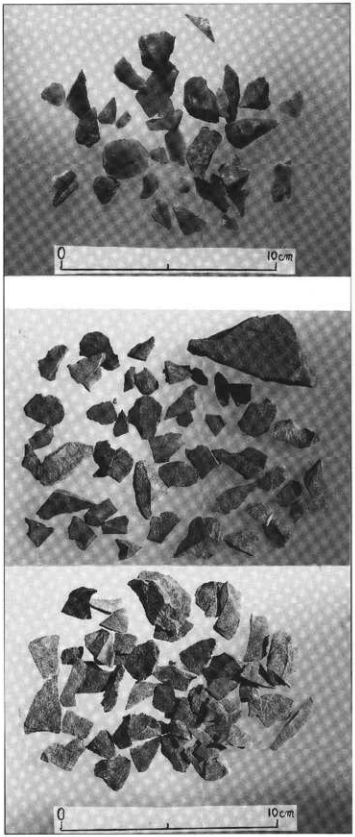
第6図　大宮・宮崎遺跡1地点出土石器

4式石鏃、基部に抉入の見られぬもの（第6図21・22）。(21) は形が歪み、基部も斜めに傾斜している。(22) は身の中央両面に第一次剥離面を幅広くとどめる粗製品で、基部は外側に膨らむ特徴を持っている。(23) は先端部のみの残片で、これも身の中央両面に幅広く第一次剥離面をとどめる粗製品で、基部は欠損し形状は不明である。

以上の他に、石器製作中に出来たサヌカイトと姫島産黒曜石の微細な剥片（石屑）がある（第7図）。サヌカイト片は93点、姫島産黒曜石片33点で、その量は前者が勝り、石鏃にみる石質割合に比例する。

(f) 文様石（第8図）

配石遺構群内より出土したもので、最大長34.5㎝、最大幅27.7㎝、最大厚7.8㎝、重量1100ｇを測る大型の扁平砂岩礫である。平面形は不整三角形をなし、両面共に上面は水平で、全面水磨により滑らかな肌を呈し縁辺は丸みをなしている。なお、これの表面は泥が染み込み全面淡黄色をなしている。文様は両面に見られ、片面にはミミズ状文と蛇状文が観察され、蛇状文は真っ白色をなして胴体をくねらせ、頭をもち上げた姿に見える。この文様は自然の妙を感じさせる。もう一方の面には、やや複雑に幅広く現れているが、この文様も真っ白色をなし鮮やかである。その文様は一見、幹から枝を伸ばした樹木のようにも見える。本石は、文



第7図　大宮・宮崎遺跡1地点出土サヌカイト（中・下段）、姫島産黒曜石剥片（最上段）

様の見られる石の中でも際立っている。

〈表面〉

〈裏面〉

第8図　大宮・宮崎遺跡
1地点出土文様石

3．考　察

平成８年度に実施された第１次発掘調査個所は、配石遺構を伴う縄文後期中葉から後葉、そして晩期にかけての祭祀遺跡であることが判明し、祭祀の盛行期が後期後葉の片粕式～伊吹町式期にかけてであったことが明確となった。遺構内や、その周辺から出土した多数の土器・石器は神に供献されたものであり、石棒・線刻礫は祭祀に使用されたものであって、後者は上黒岩岩陰遺跡[4]（愛媛県上浮穴郡美川村）で明らかとなっており、縄文草創期に出現をみるものの、後期にも存在することが本遺跡の出土例から実証されたのである。それらの貴重な遺物を包蔵していた泥を今回、篩に掛け本調査で見落とした遺物の採取を実施したのであるが、作業時間が十分に取れず保存していた泥の約50分の１程度にとどまるものであったが、それによって得た遺物は既述のとおり土器、石器共にまずまずの量が得られ、一応の成果を上げている。

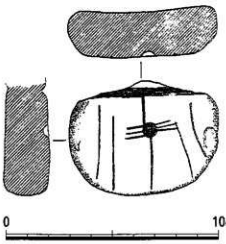
さて、図示した23点の土器は平城１式、片粕式、伊吹町式、大宮・宮崎Ｋ式、中村１式と後期と晩期の２時期５型式十器が明らかである。型式編年的には平城１式が最も古く後期中葉、次に同期後葉の片粕式と続き、その後に出現をみる広瀬上屑式は今回欠落し、それに後続する伊吹町式が見られ、その発展型式とされる大宮・宮崎Ｋ式が徴量確かめられた。晩期は中葉の中村１式がみられ、その前半と後半期の資料は欠落している。これらは第１次発掘調査資料同様、主体をなすのは伊吹町式土器である。伊吹町式とその祖型となる片粕式は、近年、四国西南部において新たな遺跡の発見と共に、その資料の増加は著しいものがある。今後、県西部一帯に良好な遺跡の発見を見ることであろう。両式土器期は、遺物内容から生活旺盛な様相が看取され、この時期における飛躍的な発展ぶりが察知されるのであるが、その背景には祭祀が大きく関与していた可能性を強く感じるのである。

石器で主体をなすのは石鏃で、形態的には１式～４式までの４つに分けられた。１式はその特徴から前期に編年位置付けが可能で、第１次発掘調査で出土の第２Ａ・Ｂ類（羽島下層式・轟Ｂ式）に伴うものとなる。２～４式石鏃は後期のものとみて大過ないであろう。ただし、４式は晩期に多く見られるタイプで、その時期に編入される可能性もないでもない。その他、スクレイパー、石錘、石材核なども後期とみなしてよいであろう。石鏃の石質割合は、サヌカイトが群を抜き多用されており、注日されるし、姫島産黒曜石も１点含まれているが、剥片量からみれば今後、その資料の増加は十分期待してよいであろう。なお、前期に編年された１式石鏃の存在は、本遺跡が狩猟の際の一時的なキャンプ地であったことの証左となろう。要するに今回の石器は、１式石鏃を除く他のものは総て後期となり、これらは出土場所が祭祀場のものであることから、神に供献されたものと見なされるのである。これによって第１次調査の資料と合わせ石錘16点、石鏃63点（サヌカイト製35点、姫島産黒曜石６点）、石材核82点、スクレイパー51点となった。特に石鏃数は倍増し、当時の狩猟にかけるウエイトの高かったことを如実に物語る。

土器は平城１式18点、片粕式140点、伊吹町式279点、大宮・宮崎Ｋ式35点、中村１式４点となるが、その順位については大きな変動はない。水晶は、前回の調査でも出土例を見たが、今回のものが最も大きい。六角形となる先端部は使用によって潰れたものであろうか、丸みを持ち鈍くなって

いる。線刻礫に見られる女人像を描く道具として、この様な硬質、先端の鋭利な水晶が使われたのかもしれない。水晶は図示した資料を合わせ7点が出土している。今後、本石材を用い礫に線刻が可能かどうかを実験考古学的によって検証する必要を痛感する。

ちなみに線刻礫については山口県岩田遺跡より出土例のあることが中越利夫（広島大学考古学）氏より提供があった。[5]（第9図）がその資料で、砂岩の扁平礫素材で、中央部から破損した残片であるがこれも女人像の描かれたものであろう。資料は、中央部に横位に1条の溝が彫られているが、この溝は体のウエストの個所にあたり、資料はちょうどこの溝線から破損した下半部をとどめるものである。中央に縦位に垂下する1条の線と、その末端に1個の小穴が彫られていること、そして、左右に3条の細線が描かれ、それを被うように着衣の襞線を表現したと見られる垂下する5条の細線が線彫されている。線描された構図、石質、大きさ、形状などからみて、これは本遺跡出土の線刻礫と同類のものとみてよいであろう。これで青森県小牧野遺跡の資料と合わせ3点となったが、岩田遺跡資料がより本遺跡のものに近似し注目されるのである。この遺跡からは土偶・有孔土製品・有孔石製品・岩版・玉類など祭祀にかかわる遺物の出土がある。なお、本遺跡の第1次調査で出土した精神文化遺物として丸石と文様石についてを取り上げ述べたが、本稿でも前回、紹介漏れとなっていた資料を第8図として図示した。この蛇身文が浮き出た文様石は、江坂輝彌（慶應義塾大学名誉教授）先生が現地視察された折、特に注目されたものの一つである。蛇文のみられるのは長野県尖石遺跡や同県井戸尻遺跡などの中期縄文土器のモチーフの中に多用され、その意味することについて故藤森栄一先生は[6]「蛇を憑代にする地母神との関連がうかがえ、神をもたらす使いとでも思っていいだろう。さらに太陽の恵みで春と共に土の中から出現する永遠の新霊への祈り、つまり種子のもつ神秘なる祈願を意味するものだろう」と分析され、さらに江坂輝彌先生は[7]「植物質食料資源の豊産を祈る対象として、地母神信仰にも関連づけられる土偶の製作が盛んとなり、また環状列石のような構築物がつくられ、蛇に対する信仰も発生した」とも述べられている。大宮・宮崎遺跡の後期縄文人の精神の中に以上のような思想が既に宿っていたのではないかとも推察されるのである。なお、この件については今後の関連資料の増加を持って再考したい。



第9図　岩田遺跡出土岩版実測図
註（5）より

本遺跡は第1次調査で明らかなとおり、大規模な配石遺構を伴う祭祀遺跡であることについては既述のとおりであるが、河原石を対象とする祭祀形態はその後、どのように変容していったかについてが問題となるところである。弥生時代には明確にし得ないものの、古墳時代には河原石を対象とする祭祀が突如として出現し、それが、しかも四万十川水系の遺跡にみられ注目されるのである。

四万十川の支流中筋川と後川（おちがわ）の下流地帯にみられる中山遺跡群[8]と古津賀遺跡[9]がそれで、共

第１表　大宮・宮崎遺跡１地点出土土器観察表

図番号	器種及び破片部位	推定径（cm）	器面調整・色調		胎　土	焼成
			外　面	内　面		
第４図１	深鉢胴部	?	灰茶色 磨消縄文ＲＬ	白黄色、撫で滑らか	長石粒 黒雲母粒	良好
2	深鉢口縁部	23	赤褐色、ススト付着、縄文ＬＲ	赤褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
3	深鉢胴部	27	赤褐色、縄文ＬＲ	黒褐色、撫で滑らか	長石粒 石英粒	不良
4	深鉢胴部	22	黄褐色、縄文ＬＲ	赤褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
5	深鉢胴部	26	暗茶褐色、撫で滑らか	暗茶褐色、撫で滑らか	大粒砂	良好
6	深鉢口縁部	30	暗茶褐色、縄文ＬＲ	赤褐色、撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
7	深鉢口縁部	22	暗茶褐色、縄文ＬＲ、撫で滑らか	赤褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
8	深鉢口縁部	28	赤褐色、縄文ＬＲ、撫で滑らか	赤褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
9	深鉢口縁部	28	灰黄色、縄文ＬＲ	灰黄色、撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
10	深鉢口縁部	32	暗茶褐色、ススト付着、縄文ＬＲ	暗茶褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
11	深鉢口縁部	22	黒褐色、縄文ＬＲ、撫で滑らか	赤褐色、撫で滑らか	細砂粒 長石粒	良好
12	深鉢胴部	24	黄褐色、ススト付着、縄文ＲＬ、撫で滑らか	黄褐色、撫で滑らか	細砂粒	不良
13	深鉢口縁部	15	赤褐色、縄文ＲＬ、撫で滑らか	暗茶褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
14	深鉢口縁部	21	黒褐色、縄文ＬＲ	暗茶褐色、撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	不良
15	深鉢口縁部	?	黄茶褐色、縄文ＲＬ	淡茶褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
16	深鉢胴部	?	赤褐色、縄文ＲＬ	赤褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
17	深鉢胴部	30	赤褐色、縄文ＲＬ	赤褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
18	深鉢胴部	27	黄褐色、箆研磨	黄褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
19	深鉢口縁部	?	淡黄色、撫で滑らか	淡黄色、撫で滑らか	細砂粒	良好
20	深鉢胴部	35	灰茶色、ススト付着、縄文ＲＬ	灰茶色、撫で滑らか	細砂粒	良好
21	深鉢胴部	28	淡黄色、縄文ＲＬ	淡黄色、撫で滑らか	細砂粒	良好
22	深鉢口縁部	27	暗茶褐色、撫で滑らか	茶褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
23	深鉢口縁部	27	暗灰色、横位条痕	茶褐色、条痕撫で消し	長石粒 細砂粒	良好

第2表　大富・宮崎遺跡1地点出土石器観察表

図番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
第5図1	石鏃	6.9	3.9	1.6	60	砂岩	完形
2	石鏃	7.4	4.0	1.2	70	砂岩	完形
3	石鏃	5.2	3.5	1.3	40	砂岩	完形
4	石鏃	4.2	3.2	1.0	27	砂岩	完形
5	石材核	6.8	3.5	2.0	50	頁岩	小型、片面全面に自然面残す
6	水晶	6.4	2.5	1.5	37	水晶	先端は潰れ鈍く尖る
7	スクレイパー	9.6	5.4	2.5	130	頁岩	大型、片面全面に自然面を残す
第6図1	石鏃	2.1	1.6	0.3	0.58	サヌカイト	先端、片脚欠損
2	石鏃	2.3	0.9	0.2	0.48	頁岩	片脚端欠損
3	石鏃	1.6	1.9	0.25	0.55	頁岩	先端欠損
4	石鏃	2.1	1.5	0.3	0.54	チャート	完形
5	石鏃	1.4	1.35	0.35	0.51	姫島産黒曜石	先端、片脚端欠損
6	石鏃	2.4	1.7	0.4	1.01	頁岩	片脚端欠損
7	石鏃	1.5	1.4	0.3	0.58	サヌカイト	先端欠損
8	石鏃	1.65	1.15	0.2	0.31	サヌカイト	両脚端欠損
9	石鏃	1.8	1.3	0.25	0.33	サヌカイト	完形
10	石鏃	2.0	1.0	0.25	0.44	サヌカイト	片脚欠損
11	石鏃	1.7	1.35	0.3	0.37	サヌカイト	完形
12	石鏃	1.8	1.2	0.3	0.51	サヌカイト	完形
13	石鏃	1.7	1.7	0.3	0.65	サヌカイト	完形
14	石鏃	1.95	1.1	0.23	0.47	頁岩	片脚欠損
15	石鏃	1.1	1.25	0.2	0.24	サヌカイト	先端欠損
16	石鏃	1.4	1.8	0.25	0.62	頁岩	先端欠損
17	石鏃	1.6	1.4	0.35	0.74	頁岩	完形
18	石鏃	1.25	1.5	0.25	0.25	サヌカイト	完形
19	石鏃	1.2	1.0	0.1	0.11	サヌカイト	完形

第3表　大宮・宮崎遺跡1地点出土石器観察表

図番号	器種	最大長（cm）	最大幅（cm）	最大厚（cm）	重量（g）	石質	備考
第6図20	石鏃	1.1	1.3	0.3	0.31	サヌカイト	先端欠損
21	石鏃	2.0	1.1	0.25	0.53	サヌカイト	完形
22	石鏃	1.9	2.0	0.4	1.16	サヌカイト	先端欠損
23	石鏃	2.1	1.4	0.25	0.57	サヌカイト	先端部残片

に大規模な祭祀遺跡である。中山遺跡群からは古墳時代初期の配石遺構が検出され、古津賀遺跡からは須恵器の杯・甕の内部に礫を入れ祭祀が行われているのである。前者の例は直径4.6mの円内に四万十川石を6ブロックに敷き詰め、中央の空間では火をたいた跡があり、動物の骨もみつかっている。これについて発掘担当者は「中山遺跡一帯は水はけが悪く、洪水で生活が脅かされてきた。ここは神を招き寄せる磐座とし、ささげ物である動物を焼いたのではないか」と分析している。

後者については「須恵器の杯・大甕は神の依代ではなく呪器と祭器を兼ね、神の依代は大甕近くに配する自然礫群であり、これが磐座である。土器に小礫を入れる祭儀は河に存する礫を河神の造形物とみなし、土器の中に封じ込めることによって神への鎮魂の儀と考え、荒ぶる神――洪水――への避難行為とした」と神道考古学の権威岡本健児（高知県文化財保護審議会会長）先生は述べられている。このように石に神が宿り、石を神の対象としていたことが古墳時代に純然と行われていたことが知られるのである。

縄文後期に起った石を対象とする祭祀は、古墳時代にも残存していた。これは大宮・宮崎遺跡にみられる祭祀形態が彼らの精神文化の中に脈々と継承されていたことの証左と解されよう。

古津賀、中山遺跡群にみる祭祀は、結論的には本遺跡の配石（縄文後期約3500年前）に起源を持つものであるといって大過ない。そして、この祭祀形態は徐々に形を変えながらも「石」を絶対とし現代へと引き継がれているのである。今日に見る神社に円（球）石[10]や時には石器[11]が御神体として祭られているが、このことがそれを如実に物語っているのである。

註

(1) 木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第3集、高知県幡多郡西土佐村教育委員会、平成11年。

(2) 出原恵三他『大宮・宮崎遺跡Ⅱ』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第2集、高知県幡多郡西土佐村教育委員会、平成10年。

(3) 西田栄・大嗣徹夫・十亀幸雄『岩谷遺跡』広見町教育委員会、昭和54年。

(4) 江坂輝彌他「愛媛県上黒岩岩陰遺跡」『日本の洞穴遺跡』昭和42年。

(5) 潮見浩「山口県岩田遺跡出土縄文時代遺物の研究」『広島大学文学部紀要第18号』平成2年

(6) 藤森栄一『縄文の世界』講談社、昭和44年。

(7) 江坂輝彌『日本文化の起源』講談社現代新書、昭和42年。
(8) 平成９年10月18日発刊の高知新聞「中村市具同中山遺跡群・古墳期の石敷き祭事跡」同年同日の讀賣新聞「中村・具同中山遺跡群・河川治水祈る祭祀跡が出土」
(9) 岡本健児「Ⅲ古墳文化・２、古代人の祈り、中筋川・後川流域の河川祭祀」『常設展示案内図録』高知県立歴史民俗資料館、平成３年。
(10) 木村剛朗「高知坐神社のご神体」『幡多のあけぼの』幡多埋文研、平成３年。
(11) 岡本健児「石斧を神宝とする神社（その１・２）」『土佐神道考古学』高知県神社庁報編集委員会、昭和62年。

4．2地点の遺物

本地点は（第2図2）と記入した個所で、斜線で印した個所は総てほ場整備された所である。この地点は本来、中央部に向い段状を呈し緩やかに下っていた所で、ほ場整備による掘削は浅い個所で深さ約50cmを測り、部分的には約1m前後と深く掘られた所もみられた。しかし、総体的には深さ約50cm前後にとどまる。ちなみに、高知県教育委員会文化財保護室の松田友彦氏によって本地点の一部が試掘されているが、約1m掘り下げた個所より縄文前期初頭の羽島下層式土器片の出土があった。

ここに取り扱った資料は土器を主体に3点の石器で、土器は前期初頭のものと後期中葉のものをわずか見る他は総て後期前葉に属する。それらの遺物は2地点のほぼ中央部に集中散在していた一括資料である。なお（第15図）資料に限っては本地点の北端部、第1地点に近接した畑面で、石器は東側の日黒川に寄った個所にて表採されている。

(1) 縄文遺物

(A) 土器（第10図～第15図）

図示した65点の資料は器形、文様、土器質などの特徴から羽島下層式、轟B式、宿毛式、三里式、平城I式の5型式に分類される。

(a) 羽島下層式（第10図1）

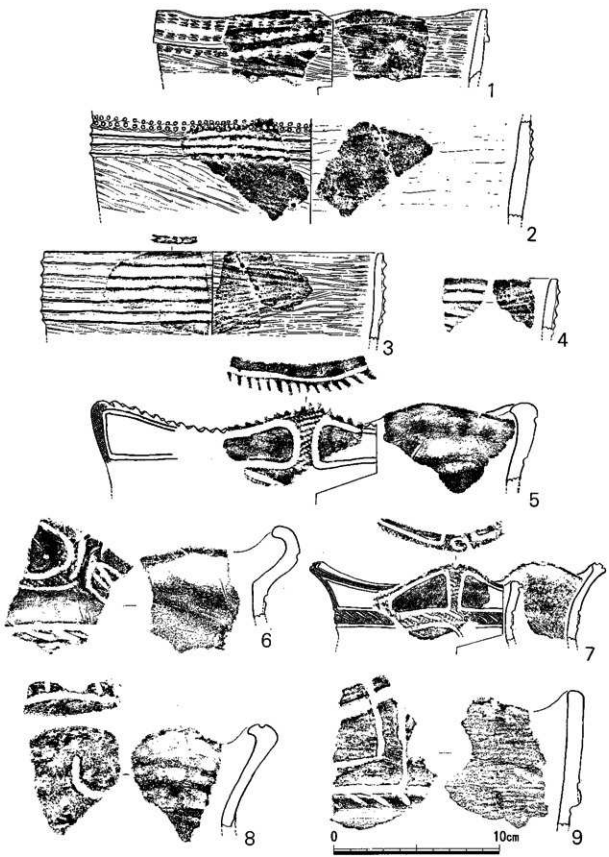
緩い波状口縁を呈する口縁部片で、器壁は外傾し、その端部は肉薄く尖り気味となっている。口縁外面には約2cm幅の貼付け隆帯が施され、隆帯は圧し気味に横撫でされ扁平化している。器面には爪形状となる刺突文が3段に巡らされている。なお、内外面には細目の条痕が横走し、推定口径は20cmを測り小型である。

(b) 轟B式（第10図2～4）

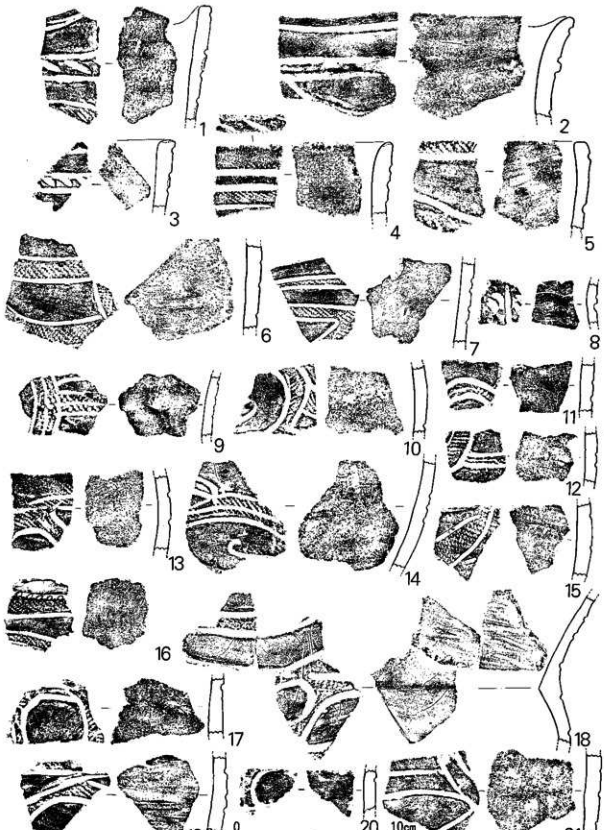
3点は総て口縁部片で、（2）は端部を欠損している。これの器肉はやや厚く、器壁は緩く外傾している。内面横位、外面には斜行する条痕がかすかに残る。特徴となるミミズばれ状の隆帯は外面に3条貼付され、その直上に小さな円形刺突文が2段にわたり連続施文されている。（3・4）の口縁部は共に器肉は薄く、端部は水平に面取りされ平坦面を持ち、器壁は緩く外傾させている。口縁部外面には前者が6条、後者は4条のミミズばれ状の粘土紐が貼付され、前者の口縁端部には刻目が連続施文され特徴的である。共に内外面には横走さす条痕をみる。なお、推定口径は（2）が27cm、（3）は21cmを測る。

(c) 宿毛式（第10図5～9、第11図1～21、第12図1～4・6～8・10）

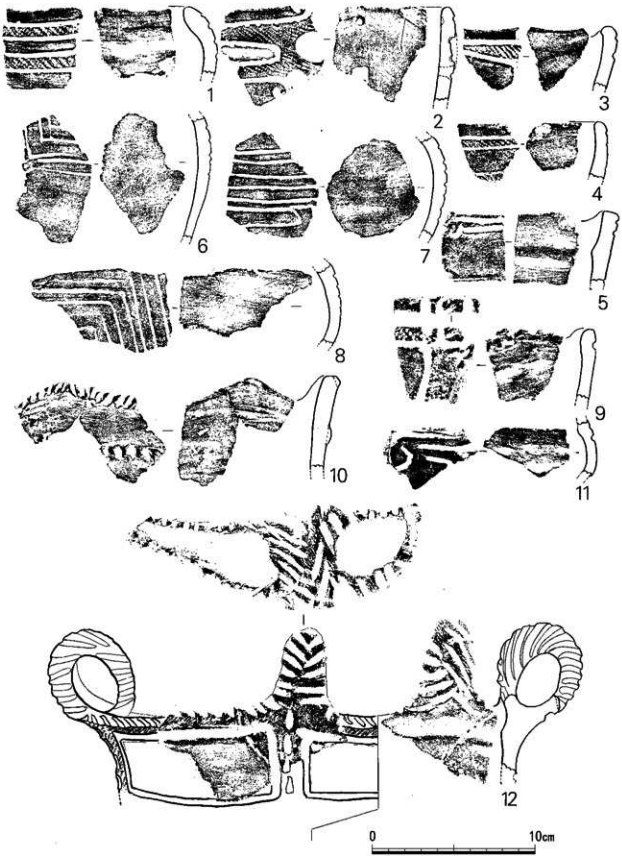
高知県宿毛市宿毛貝塚出土の後期前葉に属する土器群を一括標式としたものである。器種は深鉢と浅鉢が知られ、深鉢の外面にみられる文様は2条単位の沈線で磨消縄文手法によって描かれるのを特徴とし、沈線の末端で入組文を描き構成する。浅鉢は研磨された器面に幾何学的文様の描かれ



第10図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器



第11図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器



第12図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器

るものがみられ特徴的である。なお、深鉢、浅鉢共に口縁内面に1条の稜を形成するのも本式土器の特徴の一つでもあり、稀に刻目文を有するものも本式の中に見ることができる。図示した資料は深鉢と浅鉢がみられ、深鉢、浅鉢共に平口縁と波状口縁がある。

深鉢波状口縁（第10図5～9、第11図1・2）器肉は総体的に厚いが（第10図7）は薄手で推定口径18.5cmを測る小型品。波状口縁の傾斜はどれも緩く、その器壁は内湾、外反、外傾するものなど多様である。口縁外面には（第10図5・7）が幅広く窓枠状文が磨消縄文手法によって描かれ、前者は口縁端部に1条の沈線とそれに接し斜行刻目文が連続施文され、後者は1条の沈線が波頂部で先端が直角に折れ、中央部に描かれる「の」字状に接している。これの窓枠状文下位に描かれる2条沈線間には斜行刻目文が連続施文されている。（6）は、波状口縁波頂部外面に2条単位の沈線で円文とその左右に長楕円文が磨消縄文手法で描かれている。（8・9）は共に無文地に文様の描かれるタイプで、前者は巻貝状文が描かれ、口縁端部には1条の沈線が巡り、それに接してやや間隔を開けた刻目をみる。後者は、2条単位の沈線が幅広く直角に折れる構成をとり、その下位の沈線に接し、2条単位の沈線が引かれ突帯状に盛り上がった沈線間に斜行刻目文が連続施文される。（第11図1・2）は共に口縁端部直下に1条の沈線が巡り、その下部に2条単位の沈線が横走し、前者は沈線間に斜行刻目文が施文され、後者は縄文が充填されている。

深鉢平口縁（第11図3～5）。器肉はどれも厚く、器壁は（3・4）が外傾し、（5）は緩く内湾している。（3）は口縁端部直下に1条の沈線が引かれ、その下位に2条単位の沈線が横走し、2条沈線間には連続斜行刻目文が施文されている。（4）は口縁端部直下にやや間隔を開けて1条の横走する沈線が巡り、その直下に2条単位の沈線が磨消縄文手法によって描かれている。（5）は口縁端部直下の1条沈線と、その沈線間を縄文で埋め幅狭い縄文帯となって口縁を巡り、さらに頸部には2条単位の斜行沈線が磨消縄文手法となって描かれる。

深鉢胴部片（第11図6～21）器肉は口縁同様やや厚く、器壁はほとんどが緩く内湾し丸みを持つ。中には外反するもの、直立気味のものも含まれている。文様は、2条単位の沈線で渦巻文状に描き、その文様に接し2条沈線が横位に描かれるもの、横走さす2条沈線に縦位に垂下する2条沈線が連結するもの、また横走する沈線に斜行する2条沈線が接続するものなどが磨消縄文手法によって描かれている。中には文様を描く沈線が3条単位となるものも若干見られる（第11図9・14）。このタイプの沈線は2条単位のものに比べ沈線筋が細かいのが特徴である。また中には無文地にそのまま文様の描かれるものも少数みる（第11図21）。（第11図18）は頸部から胴上部をとどめる資料で、頸部は外反し、胴上部は緩く膨らみをみせ、胴、頸部の境目となる内面には稜を作出している。外面には横走さす縄文帯を頸、胴部に持ち、胴部では縦位に垂下する縄文帯が横走さす縄文帯に接し文様構成している。

浅鉢（第12図1～4、6～8）口縁部片4点、胴部片3点で、口縁は1点が緩い波状を呈し、他は総て平口縁である。口縁の器肉はやや厚く、器壁は緩く内湾、強く内曲するもの、内湾気味に外傾さすなどがみられ、その端部はどれも丸く作出されている。文様は磨消縄文となるものと沈線文のみの2タイプがみられ、共に外面に幅広く持ち、磨消縄文タイプは2条単位の沈線で描く縄文帯を横位に数段重ね文様構成する。なお、（2）は2条単位で描く文様帯のその集約文部分で、幅広

い縄文帯中央に大きな円文が描かれている。

沈線文のみで描かれるタイプ（6～8）は、総て胴部片で、丸く膨張させた器形を呈する。2条単位で描かれる文様は横走し、それを3～4段重ねる構成をとるものと、横走する沈線が途中で直角に折れる構成となる2種があり、文様を描く沈線は先の磨消縄文タイプに比べその沈線は細く特徴的である。本タイプの器面は、どれも入念に篦研磨され光沢を持つ精製品である。

以上の宿毛式土器の中には、他に無文地に刻目文だけで飾る素朴なタイプの土器がわずかではあるが含まれる。（第12図10）がそれで、波状口縁を呈する深鉢である。波状の傾斜は強く、波頂部は尖り気味に山形を呈し、器壁は外傾し、端部は水平に作出される。全体的に黒褐色をなし、土器質共にやや異質である。刻目は口縁と頸部にみられ、口縁では、端部の外側縁に直線的に深く鮮明になされ、頸部では指頭状の刻目文が横位に連続施文されている。

(d) 三里式（第12図5・9・11～12、第13図1～10、第14図1～10）

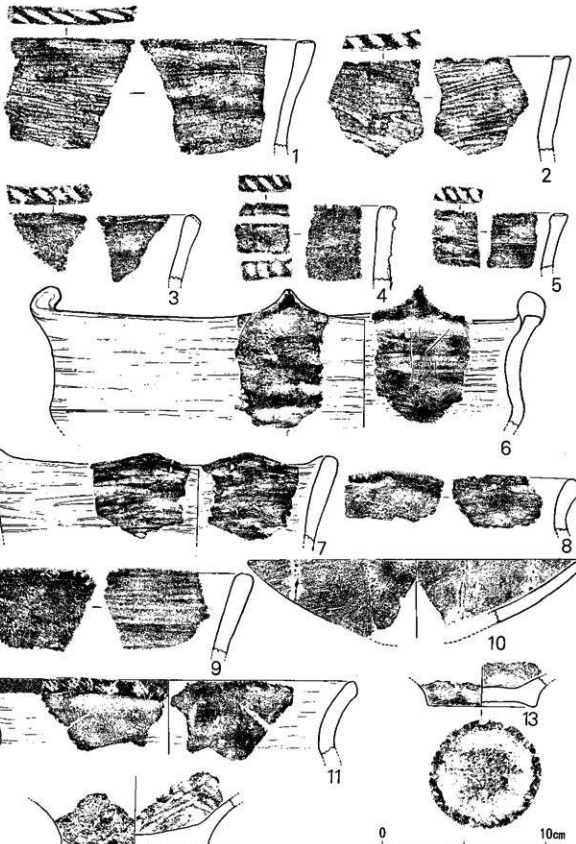
四国西南部にみる成立期縁帯文土器で、標式遺跡は高知県中村市三里遺跡出土の後期前葉の土器であって、宿毛式からの推移を示し、愛媛県南宇和郡御荘町平城貝塚出土の平城Ⅱ式の祖型となるものである。したがって本式土器には宿毛式と平城Ⅱ式の両要素を顕著にとどめる。

土器は先述の宿毛式よりやや少なく24点を図示している。器種は深鉢を主体に浅鉢がみられる。深鉢は波状口縁と平口縁があり、浅鉢は平口縁のみである。

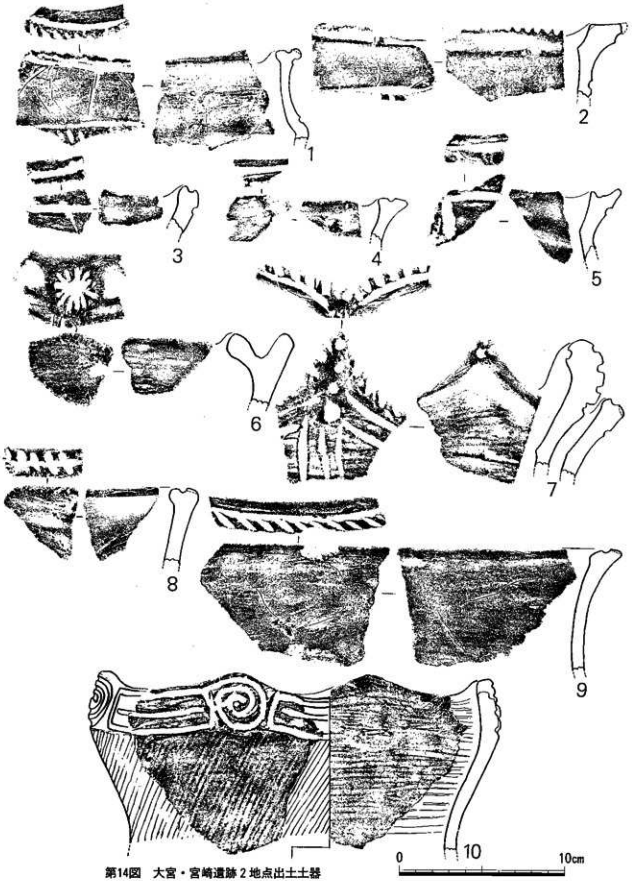
深鉢波状口縁（第12図5・9・12、第13図6・7、第14図1～7・10）波状の傾斜はどれも緩く、稀に急斜さすものをみる。それらは有文、刻目・無文などがみられ、前者の中には磨消縄文手法となるものと無文地に直接文様を描く2種がある。

磨消縄文タイプ（第12図5・9・12、第14図1・2・5）、（第12図5・9）は共に器壁は緩く外傾し、（5）は内面に1条の稜を持ち外面には口縁に平行し太い沈線2条が引かれ、沈線末端に弧状短沈線を描き文様集約部を形成する。弧状短沈線は左右対向させていたものと思われる。（9）は外面の口縁部に接し1条の沈線が巡り、波頂部で直角に折れて幅広の帯縄文を垂下させ、波頂部には同心円状文が描かれている。（12）は良好な資料で、器壁はわずか外反し波状口縁波頂部にはリーング状の大きな突起を持つ。口縁端部は幅広く拡張させ、その中央に1条の太い沈線が巡り、沈線両側縁には刻目が連続施文され、この刻目はリーング状突起面に巻き付き連続施文されている。波頂部直下の外面には引っ張り気味の刺突文が縦位に4個連続施され、その左右に幅広く長方形区画文が描かれ、区画文外側に切れぎれに縄文が充填されている。（第14図2・4・5）は土器質、色調、器形などから（第12図12）と同一個体とみられる。（第14図1・3・6）も口縁端部を幅広く拡張させたもので、その器壁は外反し、（1）は口縁端部に1条と、その外面直下に1条の沈線が描かれ、端部を巡る沈線の外側には斜行刻目文が連続施文され、無文となった頸部と胴上部との境目に1条の沈線が巡らされている。（3）は口縁端部と端部直下の外面に1条ずつの沈線が描かれている。（6）は外面が無文で、波頂部の端部に特徴的な菊花文状の文様が描かれ、その左右には太い沈線が巡らされている。

無文地に文様を描くタイプ（第12図11、第14図7・10）、（第12図11）は胴上部片で、外面中央に



第13図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器



第14図　大宮・宮崎遺跡2地点出土土器

はやや乱れた渦巻文と、それに接し横走する2条の平行沈線が描かれる。(第14図7)は波頂部が山形状に尖る波状口縁を呈し、器肉は厚く、器壁は緩く内曲させ内面には1条の稜を形成する。口縁端部は丸みをなし、その端部に1条の沈線が引かれ、沈線に接し斜行する刻目文が連続施文されている。外面には波頂部から縦位に円形刺突文が4個施文され、その左右に2条単位の沈線が口縁に平行し描かれ、その中央には縦位に垂下する3条の短直線を描き文様構成している。(10)は緩い波状口縁を呈し、器壁は緩く内湾気味に立ち上がり、端部は水平にカットされ平坦面を持つ。文様は、口縁外面に幅広く持ち、波頂部直下の外面に渦巻文とその左右に長方形区画文を描き中央に1条の沈線を縦位に単独施文し文様構成している。外面は急斜させ特徴的な条痕を、内面は横走させ条痕を残す。

無文タイプ(第13図6～9)波状口縁と平口縁がある。波状口縁(6・7)は、(6)が小さく山形状に尖る波頂部を形成し、その波頂部は丸く肥厚させている。長い頸部は外反し、胴部は緩く膨らみ最大径を胴上部に持つ。(7)は緩い波状口縁を呈し、器肉はやや厚く器壁は外反させ、端部は丸く作出されている。ちなみに前者の推定口径13cm、後者は22cmを測る。平口縁(8・9)は、(8)が外反、(9)は外傾させ、前者は端部を丸く肥厚させ、後者は全体的に肉厚で、端部は平坦気味に作られ、内面に横走する条痕を残す。

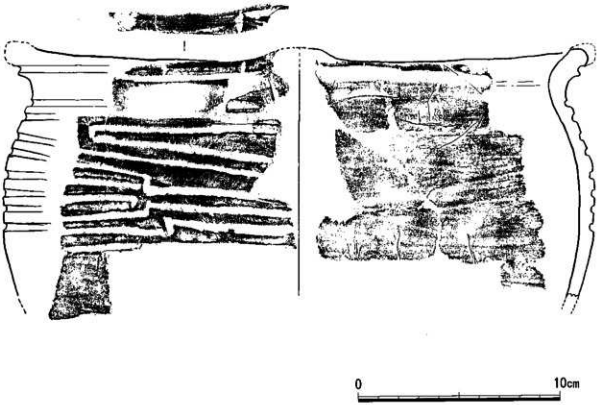
浅鉢(第13図10)1点の資料で、器壁は強く外傾させ、口縁端部は尖り気味となっている。推定口径21cm、器高5.5cmを測る小型である。

底部(第13図12・13)、(12)はやや大きく推定底径9cm、(13)は7cmを測り、共に高台状の作り出しを持つ上げ底である。なお、(13)の高台底面の全周に粗く刻目が施され特徴とする。

刻目文タイプ(第13図1～5、第14図8・9)7点の口縁部片は総て平口縁を呈し、器壁は緩く外反、外傾させ、その端部は肥厚し平坦面を持ち、その面に斜行する刻目文を深く端正に連続施文させている。刻目は総て左斜させ特徴を持つ。なお(第13図4)は口縁端部外面直下に1条と、その下位にも1条の沈線を横走させ、下位の沈線には連続刻目文が沈線に接し施文されている。(第14図8)は1条の沈線が連続刻目文の中央を巡り、刻目文を切り込んだ形となっている。また(第14図9)は刻目文の内側に1条の沈線が巡る。本タイプの器面には、横走させ条痕の残るものが多い。

(e) 平城1式(第13図11、第15図)

深鉢の口縁と、口縁から胴部をとどめる資料の2点である。(第13図11)は従来平城5類とされていたもので、口縁外面に幅狭い縄文帯を持つ。器壁は外反し、端部は丸く作出されている。これの胴上部にも縄文帯が形成されていたものと思われる。(第15図)は平城1式の範ちゅうに含められているもので、口縁は強く外反し、頸部は寸詰まりとなって短く、胴部は丸みを持ち緩く膨らんでいる。口縁は緩い波状を呈し、波頂部は丸みを持たせて肉厚く作出され、この個所には直線で角ばった入組文が描かれている。胴上部にも文様帯を持つが、この個所には傾斜の緩い逆三角形文を連続転回させていたものと思われる。本資料には、その文様の一部をとどめるが、沈線の末端に縦位の短直線が描かれ特徴としている。これらの文様は無文地に直接描かれ、推定口径29.5cm、胴最



第15図　大宮・宮崎遺跡２地点出土土器

大径29cmを測る。

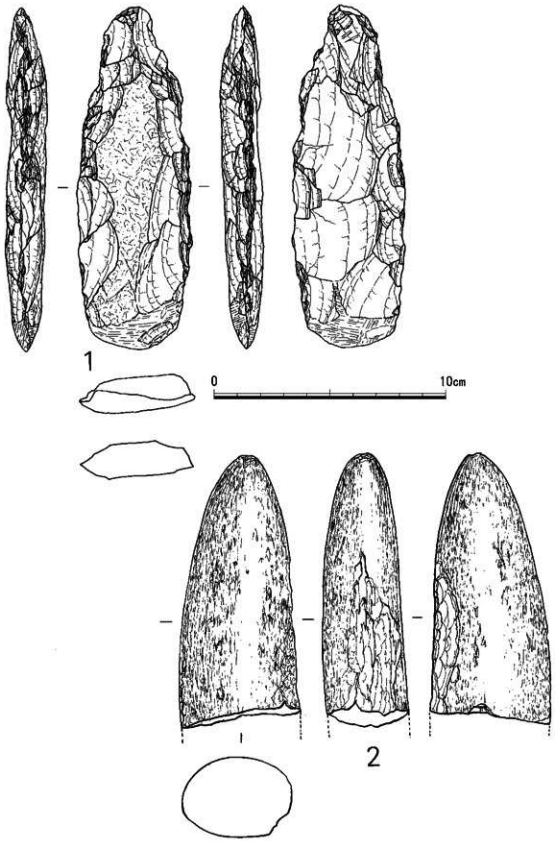
(B) 石　　器

(a) 局部磨製石斧（第16図１）

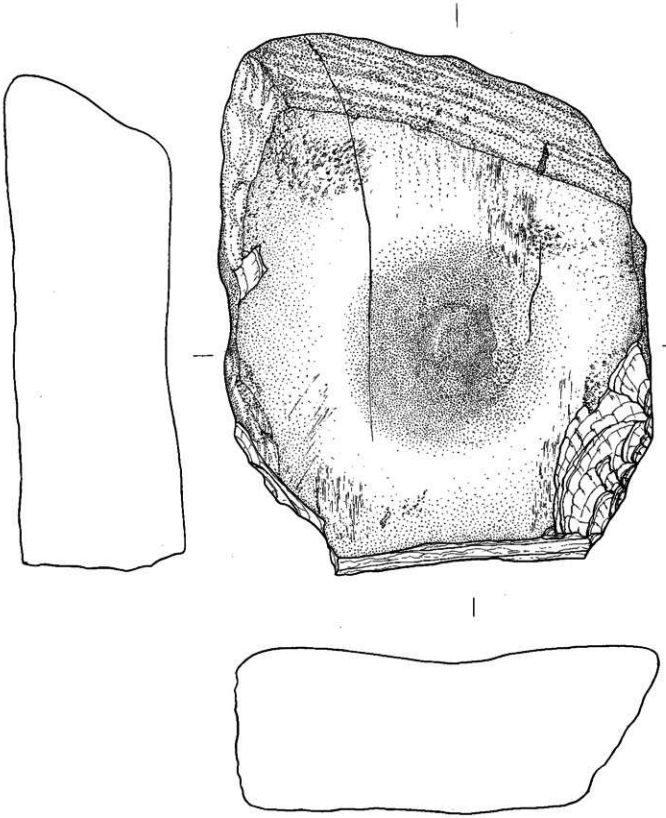
全体形は短冊状を呈し、側面観は真直に近く、器肉は大きさに比べやや薄く扁平である。頭部は尖り気味に調整され、最大幅を中央部に持ち、刃部に向かい幅をわずか狭め外湾する刃部へと移行する。打調は両側縁より粗くなされ、その後、細かく打ち欠きを加え整形している。片面中央には原礫面を幅広く残し、一方の面にはそれをとどめない。刃部は両面より均等に研がれ鋭い刃部を作出し、刃先には刃こぼれ、使用痕は認められない。

(b) 乳棒状磨製石斧（第16図２）

刃部を破損し、体部から頭部にかけてをとどめる残片である。頭部は尖り気味で、刃部に向かい幅を広め断面形は楕円形を呈し、全体的に分厚く棒状を呈する。これは敲打によって整形され、その後、全面研磨し仕上げている。なお、体部両面には部分的にアバタ状となった敲打痕をかすかに残し、頭端部と片側面の一部に打ち欠き面をそのままとどめ、側面はわずかに湾曲している。



第16図　大宮・宮崎遺跡２地点出土石器



第17図　大宮・宮崎遺跡2地点出土石器

(c) 石　皿（第17図）

平面形は不整長方形を呈し、最大長29.3cm、最大幅23.1cm、最大厚8.9cmを測る大型である。石質は細粒質の砂岩製で、板状となった自然礫を素材とし、座りは非常に良く安定している。表面の風化はあまり進行してなく灰白色を呈し、底面は節理面より剥がれたザラザラした面をそのままとどめ、使用面となる表面は水磨によって滑らかとなった肌をそのまま残す。短軸の一辺には直線的にカットした面をとどめ、その両サイドの角には粗い打ち欠きがみられる。これの使用面は、ほぼ中央部に直径約10cm範囲に円状にとどめ、中央部が皿も凹み約1cmの深さを示し、外側へと緩やかに摩滅し凹んでいる。凹み周辺には磨石の使用によって生じたものであろう微かに線条痕が観察される。

5．考　察

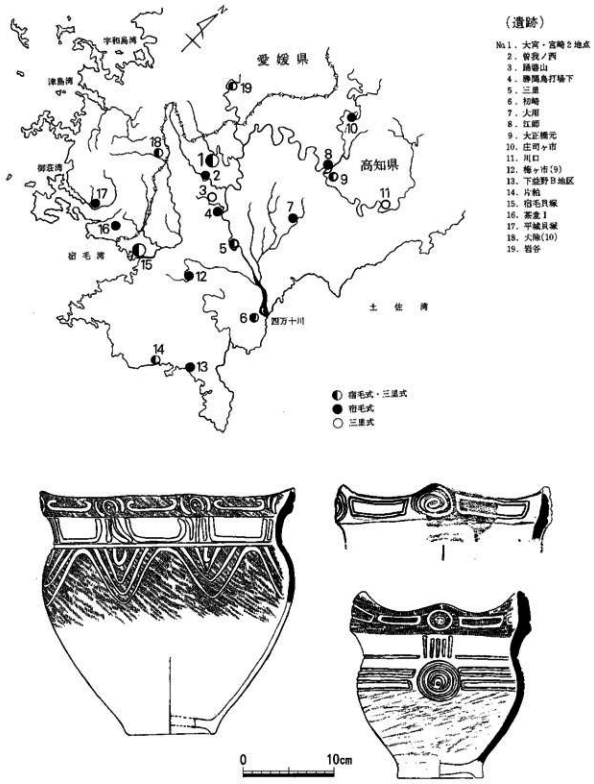
土器を主体に石器3点を述べてきたが、1点の石斧は刃部のみを研磨した、いわゆる局部磨製石斧である。作り、全体形、特に刃部の特徴などから、これは神子柴型石斧（長野県上伊那郡南箕輪村神子柴遺跡出土石斧標式）の範ちゅうに含めて大過なく、本遺跡最古の縄文草創期（約12,000年前）に編年位置付けが可能である。この時期のものとしては1点にすぎないが、本地域の調査が進むにつれ将来、必ずや当期の土器を含めた他の遺物の増加が期待されよう。乳棒状石斧と石皿は、前者は同タイプのものとして栃原町影地[1]と御荘町平城貝塚[2]の2遺跡に出土例が知られ、共に縄文前期のものと推定されており、本資料も同時期と見て大過なかろう。強いていうならば平城貝塚には轟B式土器の出土があり、また本遺跡にも良好な同式土器がみられる。このことから本石斧は前期でも初頭に編入が可能であろう。石皿は大型で特徴的であるが、これと同タイプのものも平城貝塚[3]に1例出土がある。しかし、それは縄文後期に属するものとされており、本遺跡の資料も同時期と見なされ宿毛式ないしは三里式土器に伴うものと考えてよいであろう。石皿はよく使い込まれ、中央が磨耗し皿状に凹んでいる。ここの後期縄文人は、ドングリの実を磨石で擦り潰し粉末にしてパン状にしたり、魚や獣類の肉をミンチ状に加工し食していたのであろう。本石器は、当時の調理具として、さらにその調理法を知る上で貴重な資料である。

土器は轟B式、羽島下層式、宿毛式（福田KⅡ式）、三里式、平城Ⅰ式の前期と後期の2時期5型式土器の出土が明らかである。前期の土器は本地方において近年その資料の増加がみられ、今回の資料を合わせ遺跡数も24個所を数えることとなった。その分布は、特に津島湾から御荘湾、さらに宿毛湾にかけての周辺を中心に四万十川の中流地帯へと帯状分布の形成が看取される。一方、南端部にかけても散在的ではあるが分布がみられ、四万十川流域では河口部にかけて分布が確認されている。この時期は九州、瀬戸内両地方からの文化波及が顕著で、西南四国において両式土器がミックスした独自の文化様相の形成がみられ注目されるのである（第18図）。この両式土器においては、かって1地点においても出土が知られ、2地点とは約70m隔てているものの、本遺跡には比較的良好な資料を出土し、四国西南部における轟B式土器出土地として最良の遺跡にランクされることとなった。とはいうものの、まだ、この時期の資料としては貧弱で、本遺跡における前期初頭は狩猟時の一時的キャンプ地であったと解さなくてはなるまい。次の中期と、さらに後期初頭中津式が欠

第18図　四国西南部の縄文前期轟B式・羽島下層式土器出土遺跡分布図

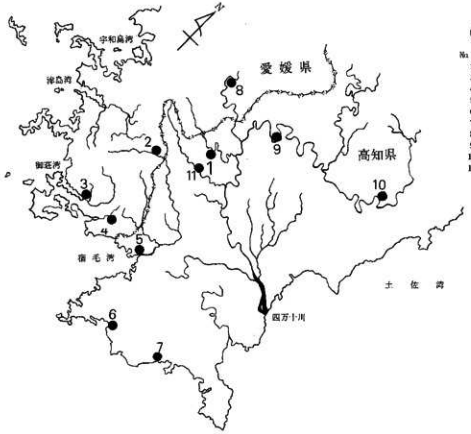
落し空白である。中津式の次に編年される宿毛式、三里式が示す後期前葉は資料も豊富で、本遺跡での盛行期を示す。この後期については、本報告書に図示してないが石鏃が多数表採されており、この時期に狩猟が盛んに行われていたことが知られるのである。土器の出土量から推して、この時期には小集落が形成されていたことも十分考えてよいのではなかろうか。

宿毛式、三里式は、土器型式編年的には連続性を持つもので、後続する三里式には先行する宿毛式の要素を随所にとどめ、その推移は実にスムースである。宿毛式は、そのほとんどが外面に描かれる文様が口縁部では、その端部にまで登り詰めた、本式で細分されている新段階に編入されるものである。[5] ただし中には（第12図1～4）にみられるように口縁端部より1段下がった位置に文様帯を有するものが見られることであるが、これは、宿毛貝塚山土の宿毛式で古段階としたものに該当し、その時期に編入が可能である。[6] 要するに、宿毛式の特徴は口縁部文様帯に強く現われ、特に新段階土器にそれは顕著である。まず口縁外面に帯状文による窓枠区画文が横位に幅広く描かれ、波状口縁の場合は、その波頂部直下に円文や渦巻入組文が施される。これらの文様は深鉢、浅鉢ともにみられ、さらに内面に1条の稜が形成されるものや、文様帯の中に連続斜行刻目文が多用されるのも本式にみる強い特徴である。波状口縁の波頂部にはリーング状の突起を稀に見るが、その部分はあまり誇張されてなくやや未熟である。この突起部は次の三里式へと移行し、極度に発達し



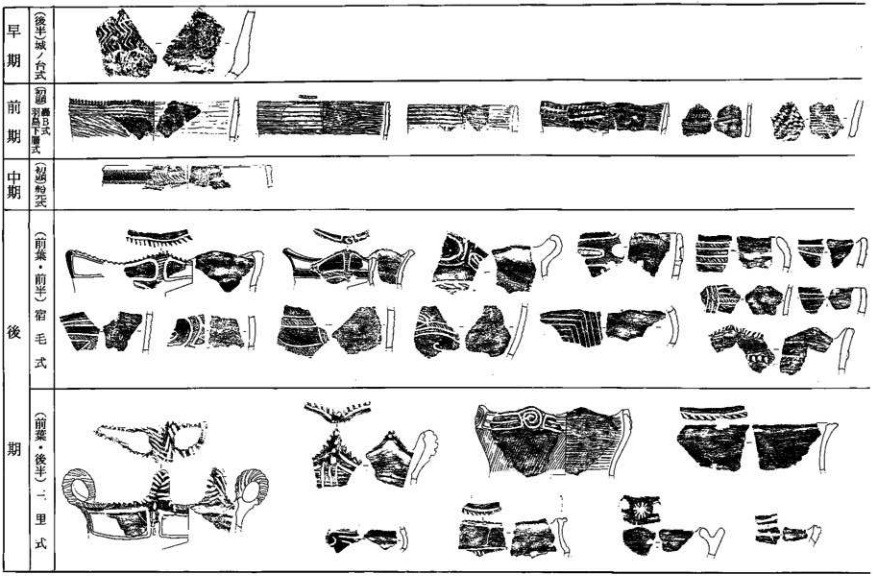
平城Ⅱ式土器（平城貝塚出土）

第19図　四国西南部の縄文後期前葉宿毛式、三里式土器出土遺跡分布図と平城Ⅱ式土器

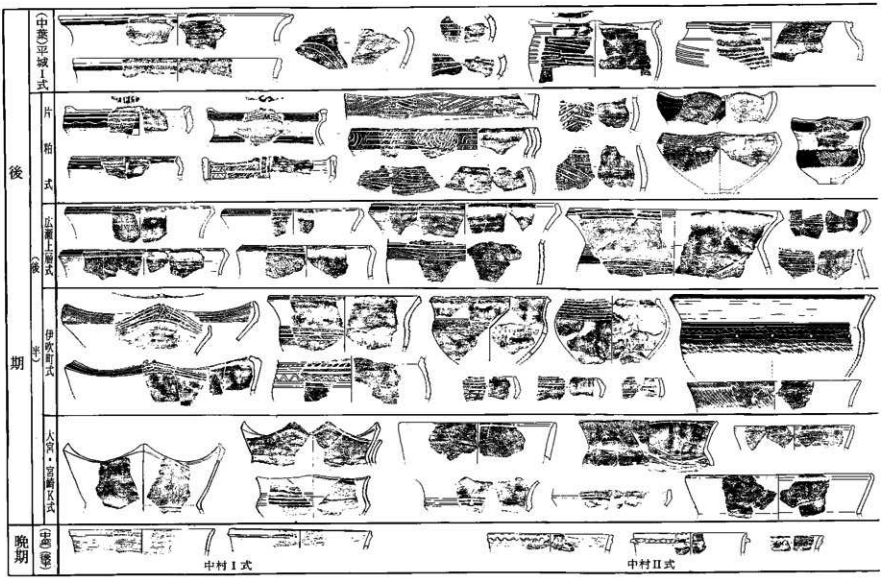


第20図　四国西南部の縄文後期中葉（後半）平城Ⅰ式（鐘崎式系）土器出土遺跡分布図

大きなリーング、また背の高い突出する突起へと発達を示す。また、口縁端部は幅広く拡張され、その面に宿毛式で特徴とする刻目文手法が踏襲され、その手法のますますの盛行をみる。刻目は、1条の沈線とそれに接して施されるもの、刻目だけのもの、さらに口縁外面に連続施文されるなどバリエーションに富む。刻目文の他、波状口縁直下に円文、渦巻文、窓枠状区画文などが沈線文のみで構成されたり、弱々しく磨消縄文手法で描かれているもの、貝殻疑似縄文となるものなど縄文施文手法の粗雑化が目立つ。以上の三里式は、口縁部に文様帯が集約され、胴部は上半部に渦巻文を中心として、その左右に幅狭い長楕円文を数段重ねるもの、衰微した入組文を描くもの、口縁主文様直下の頸部に統位に垂下させ短直線を数条描くなどを見る。いわゆる四国西南部における成立期縁帯文土器として位置付けされる土器群である。四国西南端に所在する平城貝塚（愛媛県南宇和郡御荘町平城）出土土器を標式とする平城Ⅱ式土器は、この三里式を祖型とし生成されたものである。もちろん平城Ⅱ式土器にみる三里式の要素の顕著なことについては、ここに詳述するまでもない。平城Ⅱ式は瀬戸内の津雲A式に対比され、編年的には後期中葉（前半）に位置する。ちなみに四国西南部における宿毛式、三里式出土遺跡は、現在19個所を数え、四国西南部の海岸部、内陸部と共に一円に分布する（第19図）。石器では打製石斧・磨製石斧・スクレイパー・石鏃・石錘・叩石などの出土をみる。この内、打製石斧・磨製石斧の出土量は比較的少なく、主体をなすのは石鏃



第21図　大宮・宮崎遺跡出土縄文土器編年図



第22図　大宮・宮崎遺跡出土縄文土器編年図

第4表　大宮・宮崎遺跡2地点出土土器観察表

図番号	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
			外面	内面		
第10図1	深鉢口縁部	21	黄茶褐色、斜行条痕	黄茶褐色、横位条痕	長石粒 細砂粒	良好
2	深鉢頸部	27	暗茶褐色	暗茶褐色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
3	深鉢口縁部	21	暗褐色、スス付着	淡黄色、横位条痕、撫で消し	長石粒 細砂粒	良好
4	深鉢口縁部	?	灰黒色	灰黒色、横位浅条痕	細砂粒	良好
5	深鉢口縁部	27	茶褐色、スス付着	茶褐色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
6	深鉢口縁部	15	赤黄褐色、篦研磨、縄文RL	灰茶褐色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
7	深鉢口縁部	16	茶褐色、篦研磨、縄文RL	黒褐色、篦研磨	長石粒 細砂粒	良好
8	深鉢口縁部	21	黄茶褐色、撫で滑らか	黄茶褐色、横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	不良
9	深鉢口縁部	38	暗茶褐色、横位条痕	黒褐色、横位条痕	細砂粒	良好
第11図1	深鉢口縁部	30	黒褐色、縄文RL	黒褐色、横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
2	深鉢口縁部	40	灰茶褐色、撫で滑らか	灰茶褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
3	深鉢口縁部	?	淡黄色、撫で滑らか	淡黄色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
4	深鉢口縁部	24	灰黄色、縄文RL	灰黄色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
5	深鉢口縁部	29	黄褐色、縄文RL	黄褐色、撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
6	深鉢胴部	35	暗茶褐色、縄文RL	灰黄茶色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
7	深鉢胴部	21	灰黒褐色、篦研磨、縄文RL	灰黒褐色、篦研磨	細砂粒	良好
8	深鉢頸部	?	黒褐色、撫で滑らか	黒褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
9	深鉢頸部	13	黒褐色、縄文RL	黒褐色、横撫で滑らか	石英粒 金雲母粒	良好
10	深鉢胴部	21	黒褐色、縄文RL	黄茶褐色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
11	深鉢胴部	29	灰茶色、縄文RL	灰茶色、横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
12	深鉢胴部	23	黄茶色、縄文RL	黄茶色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好

第5表　大宮・宮崎遺跡2地点出土土器観察表

図番号	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調		胎土	焼成
			外面	内面		
第11図13	深鉢胴部	36	暗茶褐色、縄文RL	暗茶褐色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
14	深鉢胴部	33	黄茶褐色、縄文RL	灰黒色、横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	不良
15	深鉢胴部	25	黒褐色、縄文RL	黒褐色、横撫で滑らか	金雲母粒 細砂粒	良好
16	深鉢胴部	32	黒褐色、縄文RL	黒褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
17	深鉢胴部	27	黒褐色、縄文RL	茶褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
18	深鉢頸・胴部	24	暗茶褐色、縄文RL	暗茶褐色、条痕撫で消し	細砂粒	良好
19	深鉢胴部	32	黒褐色、縄文RL	黒褐色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
20	深鉢胴部	?	黒褐色、撫で滑らか	灰茶褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
21	深鉢胴部	35	暗茶褐色、撫で滑らか	灰黄茶色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
第12図1	浅鉢口縁部	24	黒褐色、篦研磨、縄文RL	黒褐色、篦研磨	細砂粒	良好
2	浅鉢口縁部	22	白黄色、篦研磨、縄文RL	黒褐色、篦研磨	細砂粒	良好
3	浅鉢口縁部	27	黄茶褐色、篦研磨、縄文RL	黄茶褐色、篦研磨	長石粒 細砂粒	良好
4	浅鉢口縁部	27	黄褐色、撫で、縄文RL	黄褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
5	深鉢口縁部	24	黒褐色、スス付着、撫で滑らか	茶褐色、篦撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
6	浅鉢胴部	27	黄茶色、篦研磨	黒褐色、篦研磨	長石粒 細砂粒	良好
7	浅鉢胴部	28	黄褐色、篦研磨	灰黒色、篦研磨	長石粒 細砂粒	良好
8	浅鉢胴部	25	灰茶色、篦研磨	黒褐色、篦研磨	長石粒 細砂粒	良好
9	深鉢口縁部	26	黒褐色	黒褐色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
10	深鉢口縁部	28	暗茶褐色、横撫で滑らか	暗茶褐色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
11	深鉢胴部	36	灰茶色、篦研磨	灰茶色、篦撫で滑らか	細砂粒	良好
12	深鉢口縁部	33	暗茶褐色、縄文LR、撫で滑らか	赤褐色、撫で滑らか	長石粒 石英粒	良好

第6表　大宮・宮崎遺跡2地点出土土器観察表

図番号	器種及び破片部位	推定径(cm)	器面調整・色調 外面	器面調整・色調 内面	胎土	焼成
第13図1	深鉢口縁部	44	黒褐色、横位条痕	黒褐色、横位条痕	長石粒 金雲母粒	良好
2	深鉢口縁部	42	黒褐色、斜行条痕	黒褐色、斜行条痕	長石粒 金雲母粒	良好
3	深鉢口縁部	30	黒茶色、撫で滑らか	黒褐色、撫で滑らか	長石粒 石英粒	良好
4	深鉢口縁部	?	淡黄色、撫で滑らか	淡黄色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
5	深鉢口縁部	23	黄褐色、横撫で滑らか	黄褐色、横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
6	深鉢口縁部	27	茶褐色、ス ス付着、撫で滑らか	茶褐色、ス ス付着、撫で滑らか	細砂粒	良好
7	深鉢口縁部	22	灰茶色、篦撫で滑らか	灰茶色、篦撫で滑らか	細砂粒	良好
8	深鉢口縁部	19	黄茶色、撫で滑らか	黒褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
9	深鉢口縁部	42	黄茶褐色、横撫で滑らか	黄茶褐色、横位条痕	長石粒 金雲母粒	良好
10	浅鉢口縁部	21	暗茶褐色、撫で滑らか	暗茶褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
11	深鉢口縁部	23	茶褐色、撫で滑らか、縄文RL	茶褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
12	底部	9	赤褐色、撫で滑らか	黒褐色、撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
13	底部	7	赤茶褐色、撫で滑らか	黒褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
第14図1	深鉢口縁部	17	黄褐色、横撫で滑らか	黒褐色、横撫で滑らか	長石粒 石英粒	良好
2	深鉢口縁部	28	暗茶褐色、撫で滑らか	茶褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
3	深鉢口縁部	32	黒褐色、撫で滑らか	黒褐色、撫で滑らか	金雲母粒 細砂粒	良好
4	深鉢口縁部	21	黒褐色、篦研磨	黒褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
5	深鉢口縁部	?	茶褐色、撫で滑らか	茶褐色、撫で滑らか	細砂粒	良好
6	深鉢口縁部	25	灰茶色、口唇部巻貝先端押圧	灰茶色、横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
7	深鉢口縁部	36	黄茶色、横撫で滑らか	黒褐色、横撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
8	深鉢口縁部	28	黄茶色、撫で滑らか	黒褐色、撫で滑らか	長石粒 細砂粒	良好
9	深鉢口縁部	46	暗茶褐色、横撫で滑らか	赤褐色、横撫で滑らか	長石粒 金雲母粒	良好
10	深鉢口縁部	24	灰茶色、斜行条痕	灰茶色、横位条痕	長石粒 金雲母粒	良好
第15図	深鉢口縁胴部	29.5 29.5	淡黄褐色、横撫で滑らか	淡黄褐色、横撫で滑らか	細砂粒	良好

第7表　大宮・宮崎遺跡2地点出土石器観察表

図番号	器種	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	石質	備考
第16図1	局部磨製石斧	14.9	5.0	1.9	141.43	頁岩	完形、灰色に風化
2	乳棒状磨製石斧	11.8	5.1	3.5	330	蛇紋岩	刃部欠損、黄褐色光沢なし
第17図	石皿	29.3	23.2	8.9	1200	砂岩	完形

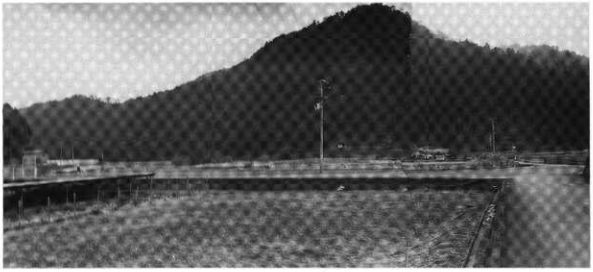
と石錘であり、狩猟・漁撈活動の旺盛であったことが知られるのである。石鏃の石質には在地の頁岩、砂岩、粘板岩などと香川県金山産のサヌカイト、大分県の姫島産黒曜石がみられ、瀬戸内、九州両地方との交易のあったことを証する。

平城Ⅱ式土器の出土は本遺跡にはなく、その後に続く後期中葉（後半）平城Ⅰ式土器の出土はわずかではあるがみられる。しかし、その資料は、特徴から本式の中でも時期的にやや下る鐘崎式（福島県宗像郡玄海町鐘崎貝塚出土土器標式）タイプである。資料に見る限り、九州的色彩のより強いもので豊後水道を挟み対岸交流の中で生成されたものとみなしてよい。このタイプ土器は大宮・宮崎遺跡1地点にも少数見られる。標式遺跡の平城貝塚の資料中にみる本タイプ土器の出土も割合的には少ない。中でも最も多くの資料を見るのは尻貝遺跡(7)（高知県幡多郡大月町）で、本地域では突出した良好な資料をみる。四国西南部における本タイプ土器出土遺跡を記したのが（第20図）であるが、これで明らかなとおり遺跡は豊後水道に面する西南沿岸部から、さらに四万十川中流地帯を東方へと散在分布している。本遺跡はその分布のほぼ中心地に位置している。この後期中葉（後半）は九州地方との密接な交流の中で発展成立していたことが明確である。出土遺物からは、本遺跡の後期中葉（後半）をもって終わっている。しかし、今後の調査如何によっては立地条件から、後期後半、さらに晩期の発見も不可能ではなく、その時期における存在の立証もなされるであろう。最後に（第21・22図）として大宮・宮崎遺跡出土土器を編年的に総括し図示した。

註

(1) 木村剛朗「影地遺跡」『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研、昭和62年。
(2) 木村剛朗他『半城貝塚』第Ⅳ次発掘調査報告書、御荘町教育委員会、昭和57年。
(3) (2)に同じ。
(4) 木村剛朗『大宮・宮崎遺跡Ⅰ』高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書第3集、高知県幡多郡西土佐村教育委員会、平成11年。
(5) 木村剛朗「窟毛貝塚」『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研、平成7年。
(6) 註(2)に同じ。
(7) 前田光雄『尻貝遺跡』高知県大月町埋蔵文化財調査報告書第1集、大月町教育委員会、平成3年。木村剛朗「尻貝遺跡」『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研、平成7年。
(8) 多田仁『中駄場遺跡』埋蔵文化財調査報告書第74集、愛媛県埋蔵文化財調査センター、平成11年。
(9) 浜田薫氏表採資料にあり、筆者実見。
(10) 多田仁『犬除遺跡』愛媛県北宇和郡津島町埋蔵文化財発掘調査報告書第1集、津島町教育委員会、平成12年。

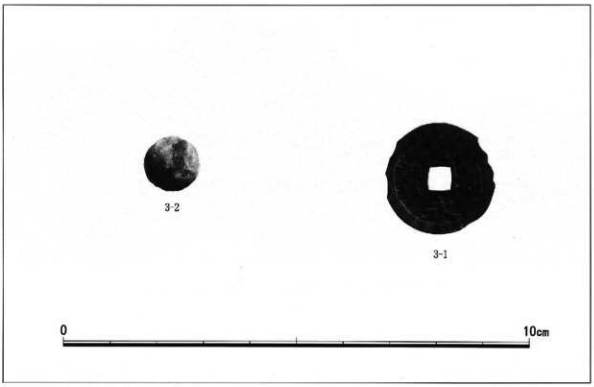
写真図版編



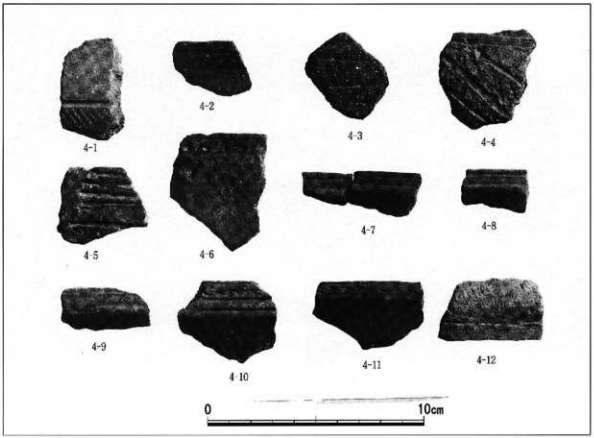
(1) 大宮・宮崎遺跡 1 地点（手前）、背景山裾の水田地帯が 2 地点

(2) 大宮・宮崎遺跡 2 地点全景（中央水田地帯）

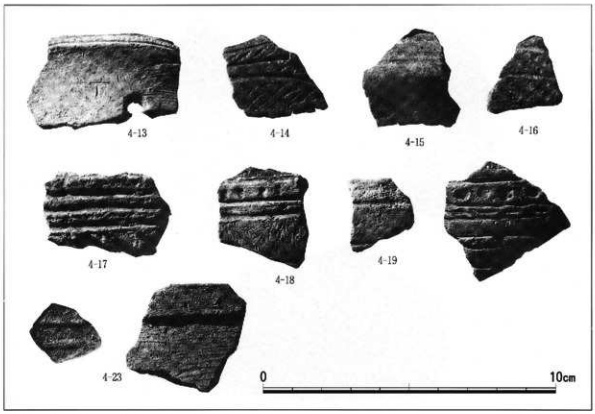
PL. 2



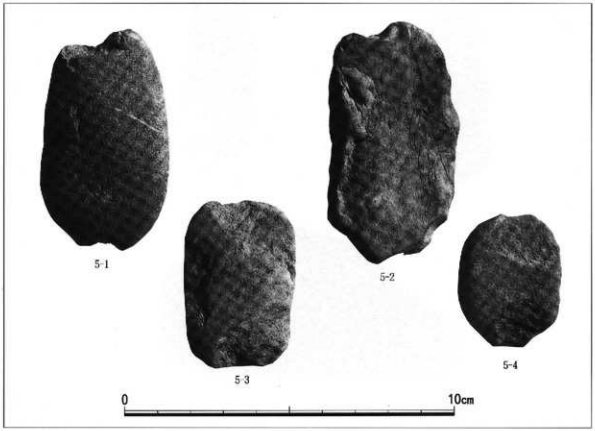
(1) 大宮・宮崎遺跡 1 地点出土鉛玉、銭貨



(2) 大宮・宮崎遺跡 1 地点出土平城 1 式土器深鉢胴部片、片柏式土器深鉢口縁・胴部片、伊吹町式土器深鉢口縁部片

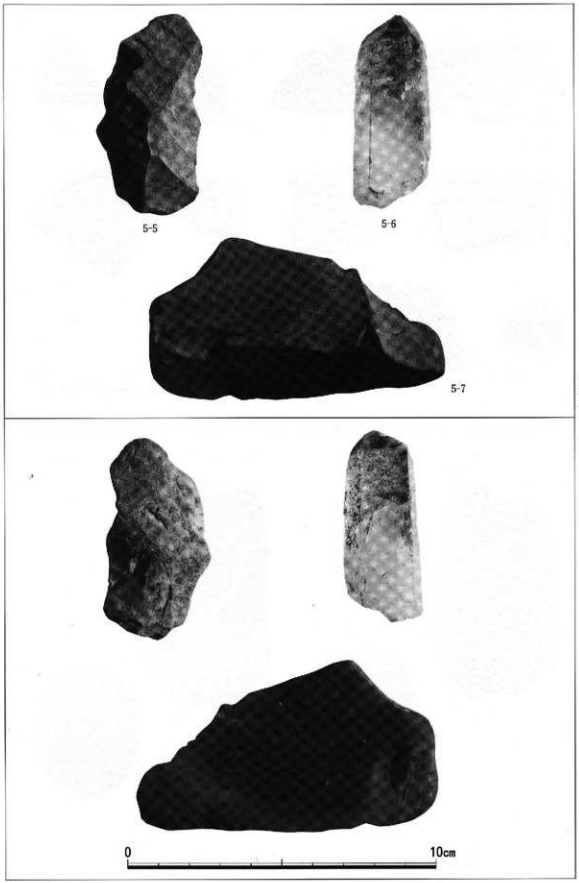


(1) 大宮・宮崎遺跡 1 地点出土伊吹町式土器深鉢・浅鉢口縁・胴部片、中村 1 式土器深鉢口縁部片



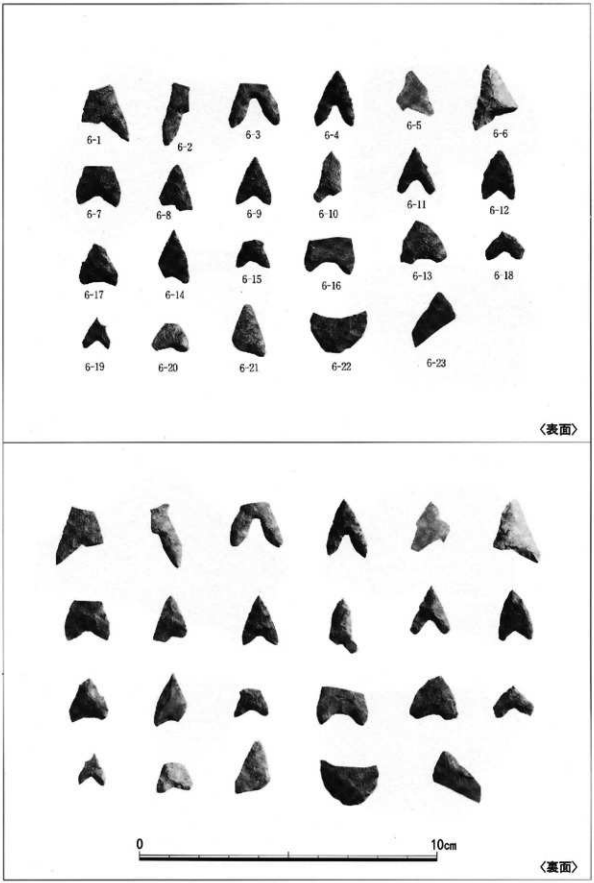
(2) 大宮・宮崎遺跡 1 地点出土石錘

PL. 4



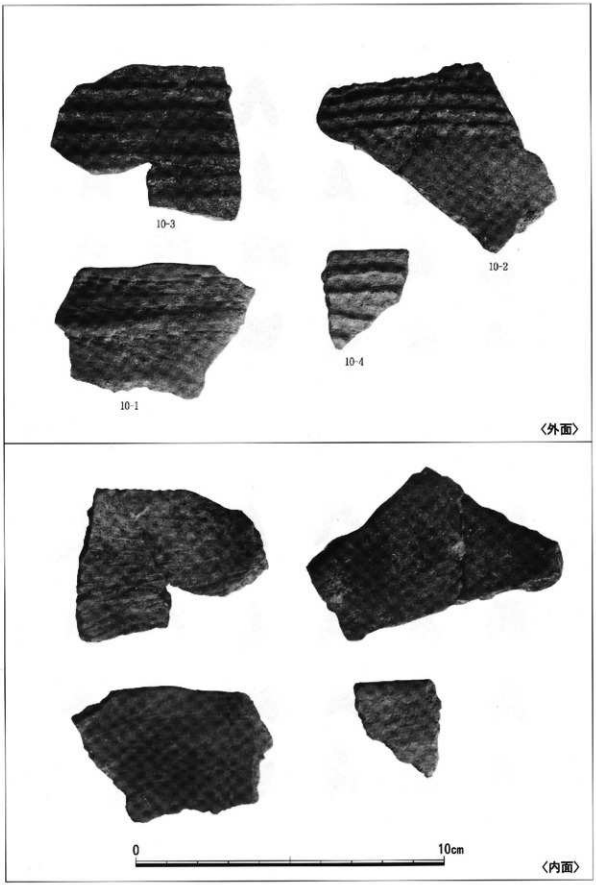
大宮・宮崎遺跡1地点出土石材核・スクレイパー・水晶

PL. 5

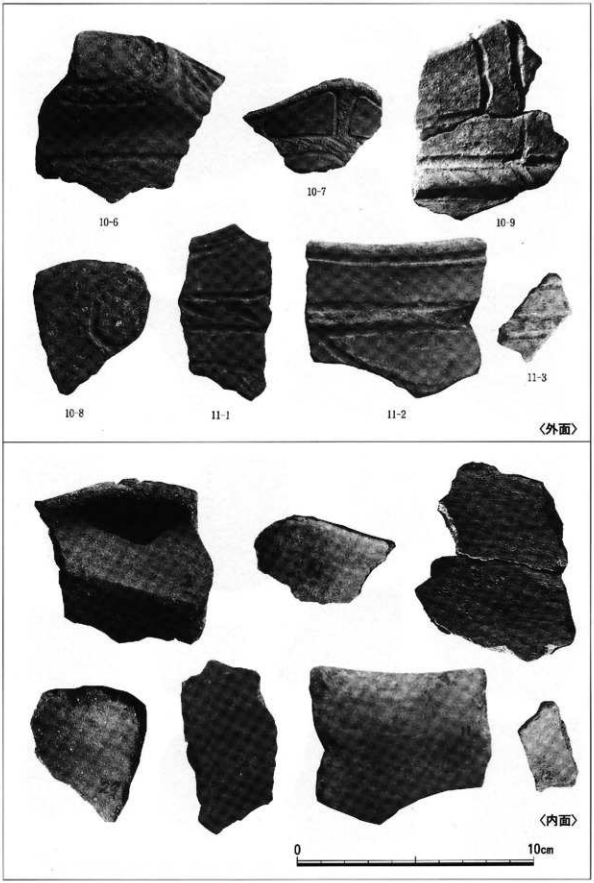


大宮・宮崎遺跡1地点出土石鏃

PL. 6

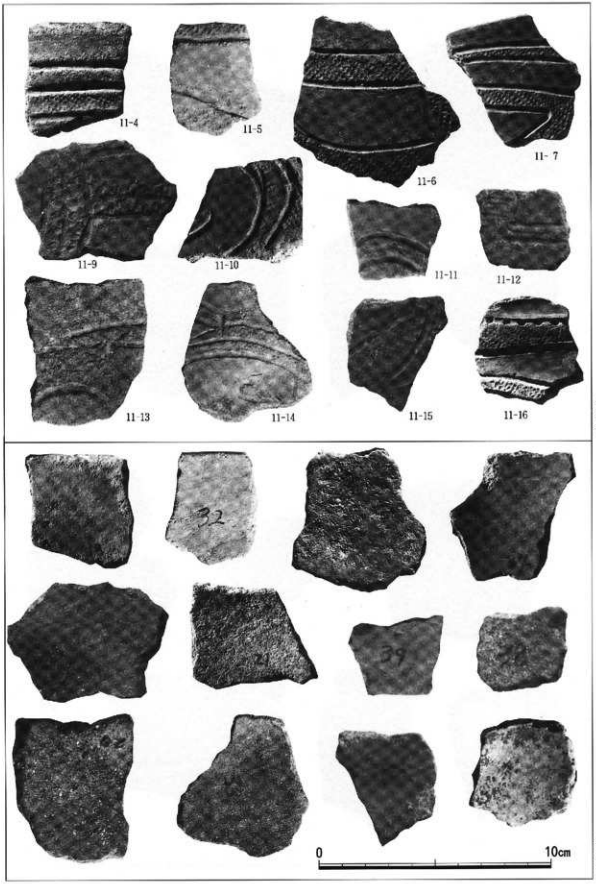


大宮・宮崎遺跡 2 地点出土羽島下層式土器、轟 B 式土器深鉢口縁部片

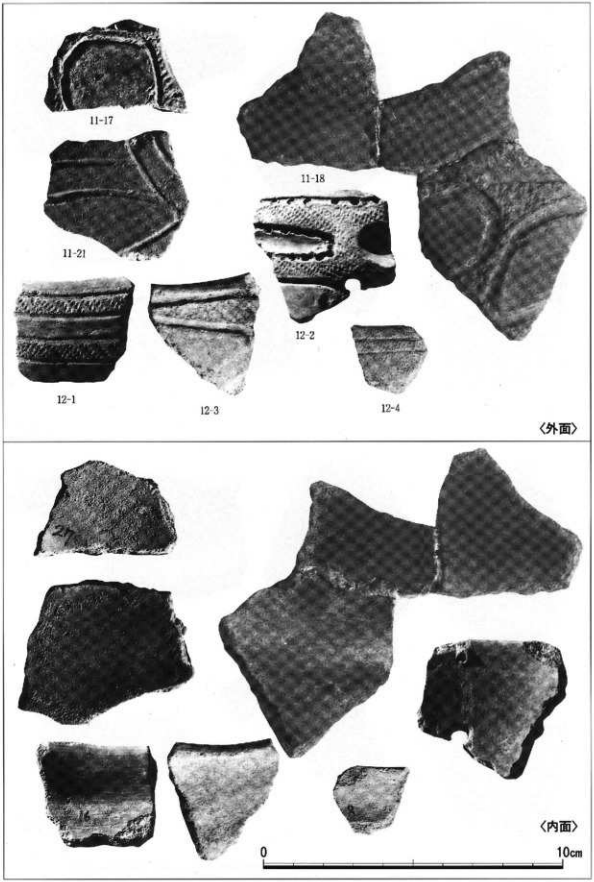


大宮・宮崎遺跡 2 地点出土宿毛式土器深鉢口縁部片

PL. 8

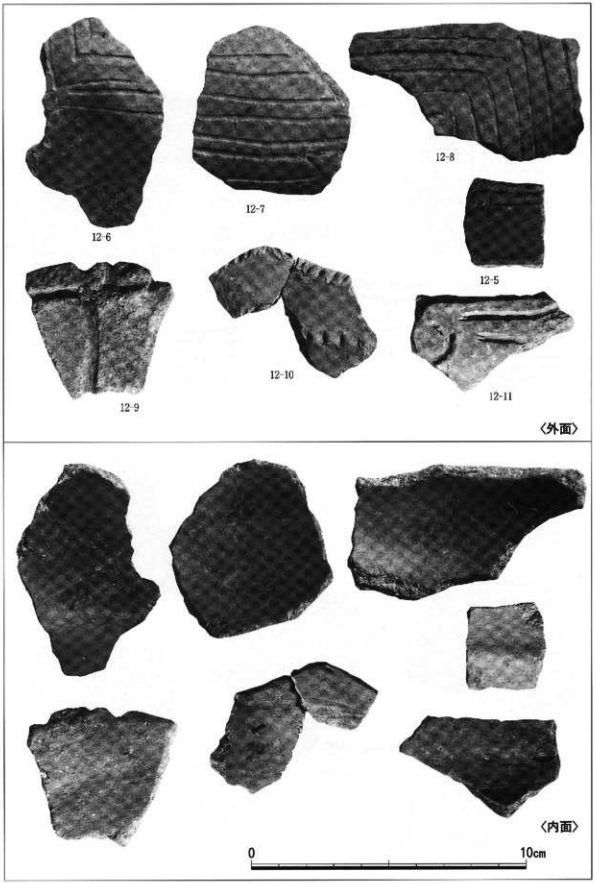


大宮・宮崎遺跡 2 地点出土宿毛式土器深鉢口縁・胴部片

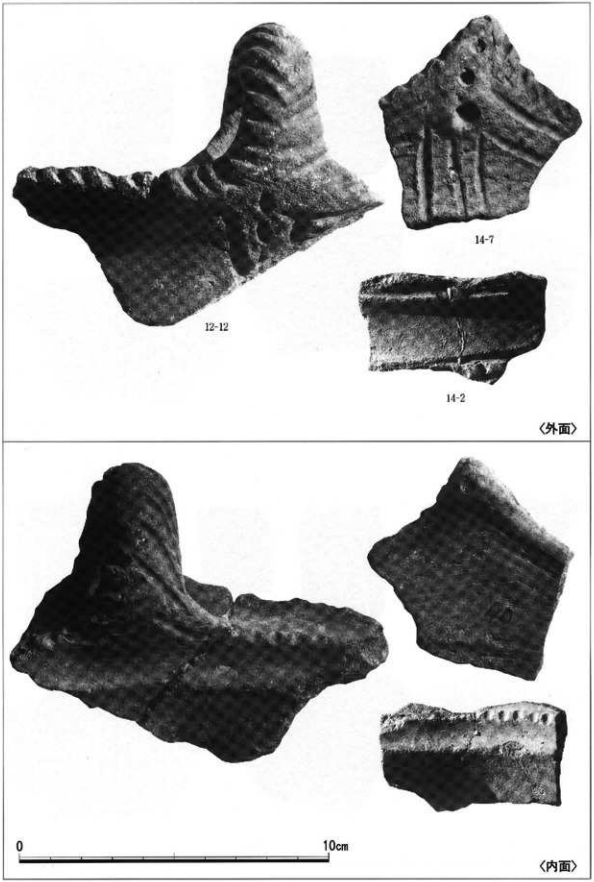


大宮・宮崎遺跡 2 地点出土宿毛式土器深鉢口縁・胴部片

PL. 10

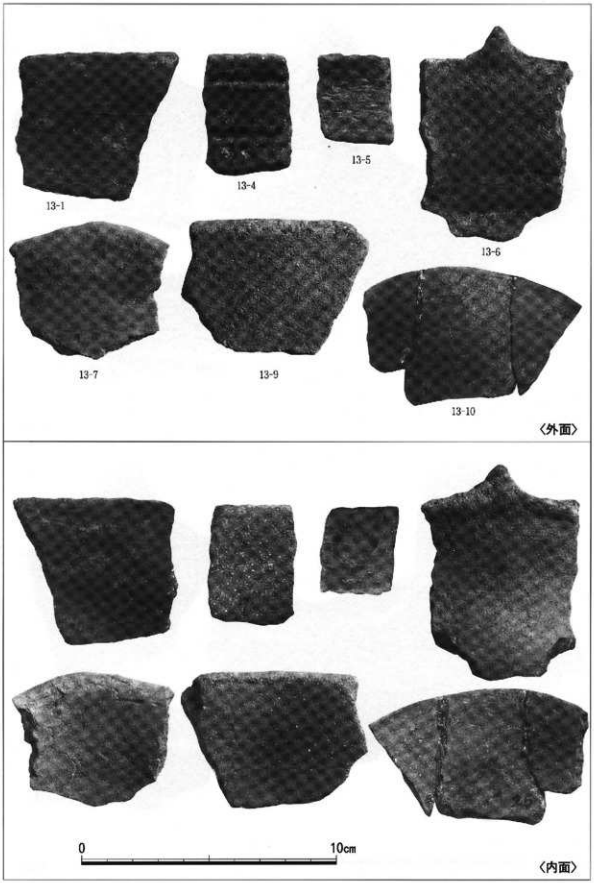


大宮・宮崎遺跡 2 地点出土宿毛式土器浅鉢胴部片、三里式土器口縁部片

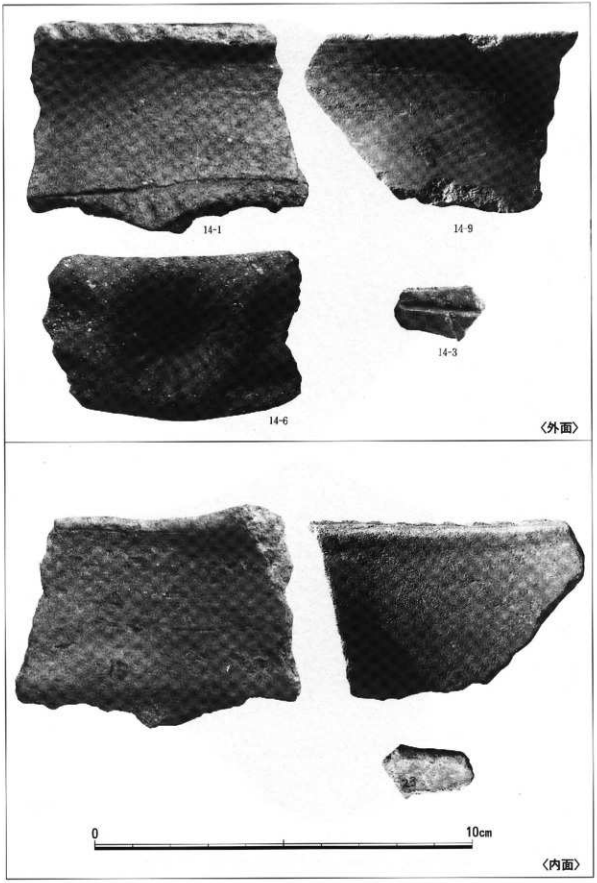


大宮・宮崎遺跡 2 地点出土三里式土器深鉢口縁部片

PL. 12

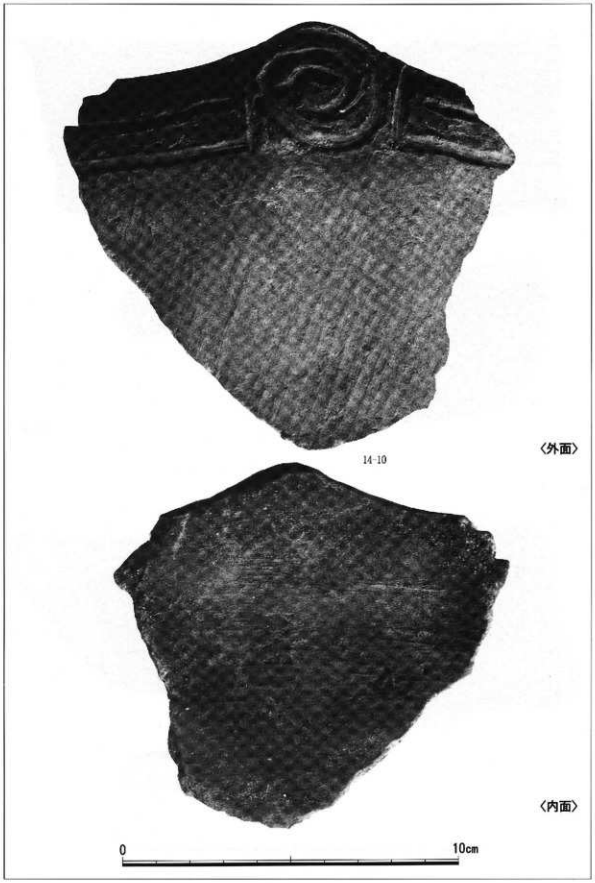


大宮・宮崎遺跡 2 地点出土三里式土器深鉢・浅鉢口縁部片

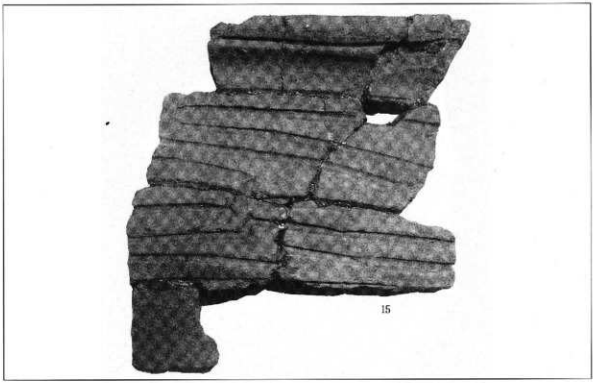


大宮・宮崎遺跡 2 地点出土三里式土器深鉢口縁部片

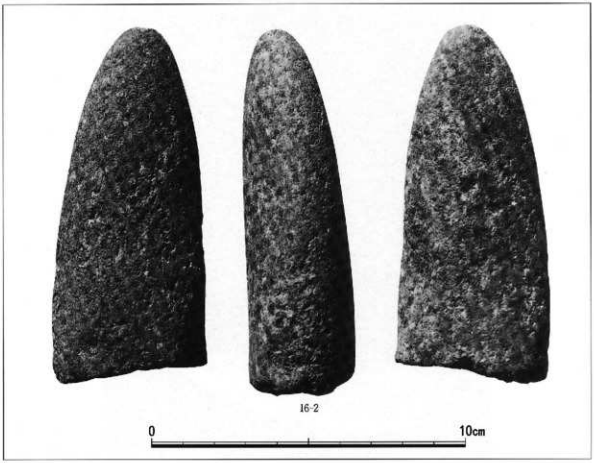
PL. 14



大宮・宮崎遺跡 2 地点出土三里式土器深鉢口縁部片

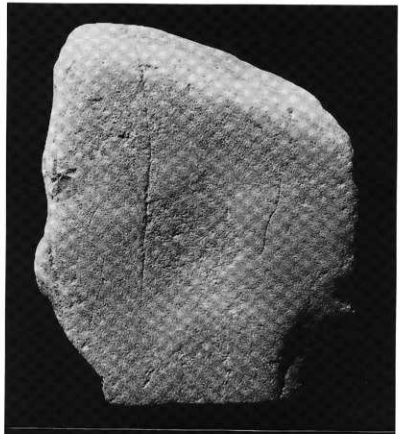


(1) 大宮・宮崎遺跡 2 地点出土平城 1 式深鉢口縁部片

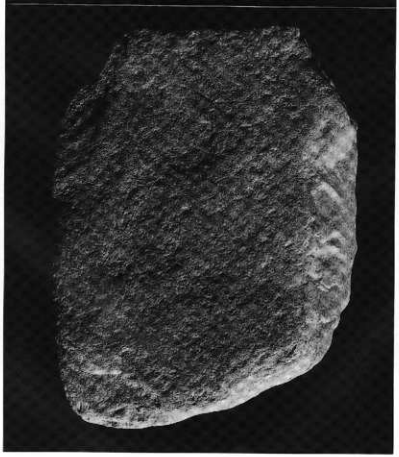


(2) 大宮・宮崎遺跡 2 地点出土乳棒状磨製石斧

PL. 16



〈表面〉



〈裏面〉

大宮・宮崎遺跡 2 地点出土石皿

報告書抄録

ふりがな 書名	おおみや・みやざきいせき 大宮・宮崎遺跡
副書名	西土佐村西土佐地区ほ場整備事業に伴う緊急発掘調査報告書
巻次	I（統編）
シリーズ名	高知県西土佐村埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者名	木村剛朗
編集機関	高知県西土佐村教育委員会
所在地	高知県幡多郡西土佐村江川崎2445－2
発行年月日	西暦2000年3月

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査機関	調査面積	調査原因
おおみや・みやざきいせき 大宮・宮崎遺跡	こうちけん 高知県 はたぐん 幡多郡 にしとさむら 西土佐村 おおみや 大宮	426	520014	33度 8分	132度 43分	西土佐村教育委員会	450㎡	西土佐地区ほ場整備工事に伴う

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
大宮・宮崎遺跡	祭祀及び遺物包含地	縄文後期	配石遺構 遺物地点分布	宿毛式土器 三里式土器 局部磨製石斧 石皿	縄文草創期の神子柴系局部磨製石斧は本遺跡の上限を示し、後期には良好な成立期縁帯文土器三里式を見る。

大宮・宮崎遺跡 Ⅰ
（続　編）

発 行 日　2000年3月
発　　行　西土佐村教育委員会
　　高知県幡多郡西土佐村江川崎2445－2
　　TEL、0880－52－1111㈹
印　　刷　㈲窪川印刷